

逗子市住吉城址

逗子市教育委員会

逗子市住吉城址

逗子市教育委員会

序

逗子市教育委員会

教育長 小林 正 三

小坪と鎌倉の間，飯島の海に臨んで，急峻な崖が聳え立っています。今は海が埋められて，昔の面影はしのべませんが，この崖のある山地一帯が住吉城址と言われてきました。

戦国時代の初め，三浦道寸義同と弟道香が此所に籠って，北条早雲の軍勢を迎えて戦いました。道寸・道香兄弟の奮戦もむなしく，城は落ちて，道寸は三浦の新井城へ遁れ，道香は逗子の延命寺境内で主従七騎自刃して果てたと伝えられています。

城の中心部には，故秀吉魁氏の邸宅があって，この部分は「げんじがやと」と呼ばれています。城の本丸にも相当する所と思われませんが，建物の玄関には，明治の元勲西園寺公望揮毫の扁額が懸けてあったりして，なかなか風格のあるお屋敷です。大正天皇が葉山御用邸にご療養中は，幣原喜重郎氏が別荘として使っておられ，此所で大臣方の会議が行なわれたと聞いております。終戦直後にも幣原氏が首相をつとめておられたこともあって，何回か此所が重臣会議の場所になったとも伝えています。

このように，古くは中世史に，近くは現代史にもゆかりの深いこの城址が，今日まで詳しい調査をされたことなく放置されてまいりました。城の範囲，地形，要害施設の状況などについて，まったくわかっていませんでした。それがこの度の調査でかなりははっきりとわかってまいりました。幻の城郭が霧の中から徐々に姿を現わしてきたといった感じがいたします。

この度，国・県・市のご援助を頂き，赤星直忠博士を調査団長に，塚田明治氏，ほか調査員の方々の数か月にわたるご努力の結果，鎌倉時代の古城の姿も，戦国時代に手を加えた，永正年間に実戦の場となった砦の姿も，はっきりと知ることができるようになりました。

本報告書の調査結果が，日本の中世史の研究に少なからざる貢献をなし得るであろうことを信ずるものであります。国・県・市のご協力と調査団のご努力に対して，心からなる謝意をささげ，序の言葉といたします。

目 次

序	小 林 正 三
---------	---------

住 吉 城 址

1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
3. 位置, 範囲, 地形	2
4. 後世の改変	4
5. 城の沿革	6
6. 住吉城正面別遺構	7
イ. 正覚寺谷正面	7
ロ. 北東尾根正面	11
ハ. うばがやと正面	13
ニ. 鷺が浦正面	15
ホ. 邸館所在地(げんじがやと)防備	16
7. 向い城	18
8. 考 察	19
イ. 古道と城との関係	19
ロ. 城の沿革からみた対敵正面	20
ハ. 攻撃正面と防禦正面の存在	20
ニ. 攻撃正面と向い城	21
ホ. 城の面積	22
ヘ. 礎石について	22
9. 総 括	23

(付) - 1 住吉城址についての諸文献

イ. 諸書にあらわれた関係記事	26
ロ. 文献について	32

(付)－2 住吉城址における葬送遺構

イ. はじめに	34
ロ. 供養塔散布地	34
ハ. やぐらの分布	36
ニ. まとめ	38
10. あとがき	41

挿 図 目 次

図 1 住吉城址の位置と地形	3
図 2 住吉城址付近の旧地形	5
図 3 住吉城址実測図	折込
図(付)－1 正覚寺境内図	31
図(付)－2 住吉城址内葬送遺構の分布	35

図 版 目 次

図版 1	城址全景	1
図版 2	城址全景	2
図版 3	城址全景	3
図版 4	城址全景	4
図版 5	城址全景	5
図版 6	正覚寺谷	1
図版 7	正覚寺谷	2
図版 8	正覚寺谷	3
図版 9	正覚寺谷	4
図版 10	正覚寺谷	5
図版 11	正覚寺谷	6
図版 12	正覚寺谷	7

図版 13	北 東 尾 根	1
図版 14	北 東 尾 根	2
図版 15	北 東 尾 根	3
図版 16	北 東 尾 根	4
図版 17	北 東 尾 根	5
図版 18	北 東 尾 根	6
図版 19	北 東 尾 根	7
図版 20	北 東 尾 根	8
図版 21	北 東 尾 根	9
図版 22	北 東 尾 根	10
図版 23	う ば が や と	1
図版 24	う ば が や と	2
図版 25	鷺 が 浦	1
図版 26	鷺 が 浦	2
図版 27	鷺 が 浦	3
図版 28	鷺 が 浦	4
図版 29	鷺 が 浦	5
図版 30	鷺 が 浦	6
図版 31	げんじがやと	1
図版 32	げんじがやと	2
図版 33	げんじがやと	3
図版 34	光 明 寺 裏	
図版 35	向 い 城	
図版(付)ー 1	葬 送 遺 構	C
図版(付)ー 2	葬 送 遺 構	1－1
図版(付)ー 3	葬 送 遺 構	1－2
図版(付)ー 4	葬 送 遺 構	3－1
図版(付)ー 5	葬 送 遺 構	3・5
図版(付)ー 6	葬 送 遺 構	6
図版(付)ー 7	葬 送 遺 構	7－1
図版(付)ー 8	葬 送 遺 構	7－2
図版(付)ー 9	葬 送 遺 構	8
図版(付)ー 10	葬 送 遺 構	10

住 吉 城 址

1. は じ め に

住吉城址は北條早雲と三浦道寸とが戦った古戦場として著名であるにもかかわらず、城址と伝承されるものはきわめて不明瞭であり、明治以後出版された郷土誌はいずれも江戸時代に著わされた新編鎌倉志（貞享2—1685年刊）・新編相模国風土記稿（天保11—1840年脱稿）に記すところをのみ拠りどころとしたものであった。調査研究書としては「三浦半島城郭史（上）」（昭和30年横須賀博物館刊）に概要を記し、「鎌倉市史考古篇」（昭和34年 鎌倉市）・「逗子市文化財調査報告書第4集（小坪・新宿）」（昭和48年 逗子市教育委員会）に訂正追加してだした（何れも筆者 赤星直忠）。それらが書かれたときから今日までの中世城郭研究の進展の上になって今次の調査が実施されたものであり、前回までに概略把握したものを基として、住吉城址調査団が実測し訂正を加えて正確な図を作製したものである。何しろ以前作られた遺構図は背丈より高い篠や灌木をくぐり歩いて作ったものであったから、調査もれがあってもわからなかったが今回調査で充分訂正された。調査概要もその後の中世城郭調査結果によって再検討し、根本的に書き改めた。鎌倉城防禦施設としてこの名越切通を中心とする尾根外側の大切岸が当然住吉城の位置までのびていたと考えられたが、両遺跡間が光明寺団地・南ヶ丘団地・亀ヶ岡団地などの広地域開発によって地形が改変されたため、住吉城址に残る尾根外側をめぐる切岸と名越切通を中心とする城塞とが一連のものであるとの確言ができなかったが、今回の調査によって遺構の類似から当然これらが一連の防禦工事であったと考えられるに至った。

2. 調 査 経 過

昭和51年10月に開発業者より、げんじがやとから湘南有料道路間（逗子市小坪5—11）の一带の開発計画が出され、それにとまって開発予定地に所在する文化財の照会があった。

市教委は、11月13日に開催された文化財保護委員会に諮り次のような結果を見た。「開発予定地は、住吉城址の中心を東西にわたって広がっている。住吉城址は未指定地ではあるが、中世の城址としては原形を良く留め、文化財として貴重なものである。そのため開発計画は城址を破壊する

ものであり、開発は中止されなければならない。現時点では、開発計画は出されたが、具体的な内容が明らかではないため、開発計画が具体的に提出された時点で、開発業者との折渉を行う。」以上により市教委としては、具体的な開発計画の提出を待ち、適切な保護活動を実施することとなった。

また同時期に、国指定史跡「名越切通」の隣接地に開発計画等が出されたため、昭和52年度・53年度の2ケ年にわたり、名越一帯全域の測量及び発掘調査が実施された。その結果、鎌倉防衛のための遺構が、鎌倉市と逗子市の境界になっている尾根に見られた。この防衛遺構は鎌倉をとり囲む尾根に見られるものであった。今回の調査対象となった住吉城址は、その尾根が海に落ち込む最東端に位置し、戦国期の城郭遺構とは別に鎌倉期に造られた防衛遺構の存在は、十分に推測されるところであった。

今回の調査が実施される以前の資料は、調査団団長の赤星直忠による調査（昭和27年実施、逗子市文化財調査報告書第4集）による資料が唯一のものであった。当時の調査は測量機器等を使用せず、赤星直忠が一帯を踏査したにすぎず、本調査は過去に一度もされていなかった。

以上により、住吉城址の細部にわたる調査が、昭和54年度の事業として国・県よりの補助金を受け、実施されることとなった。

市教委は以上の結果を踏まえ、赤星直忠を調査団長とする住吉城址確認緊急調査団へ調査を委託した。

調査は全域にわたり、トランシット・レベル・平板等を用い、詳細な実測図を作成し、城郭の全容を明らかにすることであった。作業は城址の範囲の確認、実測、遺構図の作成の三段階に分け、遺構の大部分が山林に被われているため、落葉期に合わせ、昭和54年10月1日より昭和55年3月31日までの間に実施された。

範囲の確認作業は、逗子市発行の1/2500の地形図を基に、地域内を踏査することから始めたが、大部分の地域が雑木林と竹藪のため、伐採しながらの踏査となった。そのため初期は遺構範囲の確認が出来ず、伐採に費やされることとなった。

実測は、伐採と前後して行われた。尾根に沿ってトランシットにより基本杭を打ち、その杭を基に平板による実測を行った。作業は基本杭の設置と平板測量の二組に分かれ進められた。

本調査は全域を測量し、遺構図の作成にその目的があったが、天候にも恵まれ、伐採に予定以上の時間を費やされたものの、順調な調査を実施することができた。

3. 位置・範囲・地形

位置・範囲 住吉城址の大部分は神奈川県逗子市小坪5丁目にあり、北東につづく一部が6丁目にあり、扇山から北東につづく尾根の西南山腹は鎌倉市材木座6丁目に属する。住吉城址の所在は従来きわめて不明瞭なものであり、光明寺西南の山を城址と伝え（鎌倉志）、あるいは正覚寺背後



図 1 住吉城址の位置と付近の地形（ 1 住吉城址 2～8 鎌倉七切通 9 杉本城址 10 鏡褶城址 ）

にある住吉神社境内と称し（新編相模国風土記稿）、あるいはその東隣の谷「げんじがやと」を城跡と伝え（土地の伝承）ていた。明治15年測2万分1地形図「小坪村」は「げんじがやと」に凸マークがあり、逗子市街地図（年次不詳・地理学研究会）は住吉神社背後丘に「住吉城跡」と記入し、逗子市葉山町全図（昭和47年・昭文社）は「げんじがやと」に「住吉城跡」と記入している。

しかるに遺構調査の結果は光明寺背後から小坪へ越える旧道（所謂小坪峠？）に臨んだ要害であり、その範囲は光明寺背後丘陵南端の「扇山」を主峯とする丘陵全体にわたるものであり、旧道の南西につらなる部分から、扇山をへて南東方小坪寺背後までの丘陵全域にわたるものであることがあきらかになった。

地形と現状 戦後鎌倉光明寺裏山一帯が宅地造成され、鎌倉第一中学校をはじめ周辺に民家群が建ち、また、逗子側に広大なる南ヶ丘団地ができたため、旧地形を考えることが全くできなくなった。鎌倉の東側を逗子と境する丘陵は国鉄横須賀線トンネルのある名越から西南にのびて、鎌倉市材木座と逗子市小坪との間を飯島岬にのびて海に達する。その間に多くの支尾根を東西にのびし、その間に多くの谷をいただくが、丘陵山腹はきわめて急峻であり、これを東西に越えることはきわめて困難な地形であった。これら丘陵先端部は飯島岬の北側において南東に折れ、小坪寺背後にまで達している。その折れ曲り部を扇山（標高65m）とよび、北西山腹は中腹以下が絶壁状となり、南東山腹の谷は中段に少しの緩傾斜地をもち、ここが幾段かに削平されて正覚寺および周辺の民家所在地となっているが、飯島から小坪西町との間は海にのぞむ部分が絶壁状になっている。江戸時代にこの絶壁中段を切り開いて飯島—小坪間を通じた。飯島切通という。扇山の南東側尾根のはのびて小坪中里町に達し、その南西山腹に狭い平場があり、もとはこれを通して飯島から小坪に達したと伝える。今はすべて住宅地になっている。尾根南東端一帯の南西側山腹中段以下は幾段かに削平されて海前寺・小坪寺のほか多くの民家所在地となる。尾根南東部分は尾根頂から北東側斜面にかけて狭く幾多の削平部がつづく。これらの部分は近年住宅地となりつつある。

古くは正覚寺谷からのぼり、扇山の南側支尾根山腹を斜にのぼって扇山の北東尾根を通り、現第一中学校南側から尾根を切通し、北西から南東に「うばがやと」に下る小坪峠路が用いられた。切通以東がその後も使われていたから古老はこれを旧道とよんでいた。大正2年扇山下を通るトンネル道が通じ、旧道の南側を小坪地藏堂辺に達し、今はバス道になっている。昭和39年逗子海岸から大崎山下を貫通し、小坪寺北方から「ぼんばたけ」を掘りわって扇山下を貫通し材木座海岸に通ずる自動車専用道が作られたため「ぼんばたけ」付近の地形が大きく改変された。また昭和46年小坪中里町から飯島正覚寺前面に至る南西側海岸を広く埋立て（逗子マリーナ）たため、要害としての旧城址の地形景観を全く変えた。

4. 後世の改変 — 破壊の記録 —

住吉城址は主として小坪5丁目から6丁目にわたるものであるが、その周辺における古い村落状

況（明治15年測量陸地測量部2万分1地形図「小坪村」）でみるに、城址南面正覚寺周辺に一群の民家があり、扇山北東から光明寺裏山を越えた部分の旧道沿いに数軒の民家があり、小坪地藏堂付近に数軒があるほかは城址南東山腹下の崖を通る本道が南東尾根の南東下を通る部分において、主として路の北側山腹下部に小坪村落の西半分（西町・中里）が存在し、東半分（伊勢町・南町）は伊勢山の南西裾に存在した。扇山を主峯とし、北東（小坪峠切通まで）と南東（小坪寺背後丘陵）にのびる丘陵全部が住吉城



図2 住吉城址付近の旧地形
（明治15年 参謀本部測量局作成1/2万地形図による）

址と考えられる現状において、城址および周辺には江戸期以後若干手が加えられ旧状を改めたが、第二次大戦前までは甚しいものではなかった。しかるに戦後きわめてはげしい改変がおこなわれ、現状から旧状を判断するに困難な状態に至った。よって明らかにできた部分について破壊部分をあきらかにするものである。記載都合上一部前記と重複する。

江戸期 飯島正覚寺下から西町海前寺下に通ずる崖中腹の路がいつ切り開かれたかわからないが江戸末期（新編相模風土記稿）には「鎌倉道」として本道になっている。正覚寺下路傍に5基の

庚申塔が立っているが、その1基に「寛文」期のものがあるから寛文ころにはこの路が存在したと判断される。(大正2年小坪トンネル開通後は主道路でなくなり、戦後岸の崩壊によって通行困難な部分ができ、今はあまり使われていない。)

明治以後 住吉神社南東隣の谷を「げんじがやと」とよび、城址であるとの伝承もある。古くから住吉神社わきから南東側丘腹をくりぬいて「げんじがやと」に通じ、さらに「げんじがやと」南東側丘腹をくりぬいて海前寺背後に通ずるトンネル路があって村民が飯島と西町との間を往来したと伝えるが、「げんじがやと」に邸宅が建つにおよんで(註1)、トンネル路が閉じられたので、住吉神社背後から丘陵下を「ぼんばたけ」に通ずるトンネル路が作られたと伝え、またこれはもともとあったとも伝え、あきらかでない。正覚寺背後谷奥から丘陵北側に通ずるトンネルは後の開通であるともいうし、古くからのものだともいう。新編相模国風土記稿には4個の洞道の存在を記しているから、それらがいずれも古いものであるかもしれない。

鎌倉市材木座海岸の東南端から扇山の下を通り小坪に通ずる小坪トンネル道が新道として開かれたのは大正2年(註2)であり、それ以後この路の両側に民家がたちならんだという。「げんじがやと」から新道方向にぬけるトンネルは大正12年ころ作られたという。逗子海岸から大崎山下を通り、城址の南東裾「ぼんばたけ」を大きくほり割り、扇山下を通って鎌倉海岸に通ずる有料自動車専用道が通じたのは昭和39年。扇山の北東尾根を横切って「うばがやと」に通ずる小坪峠は切通になっていたが、路の北側部分が削平されたのは戦後(註3)である。最も景観を改めたものは南東側前面海岸の大規模埋立であり、昭和46年には埋立は終了し、昭和52年には現在みられるが如き状景に改められた(註2)。現地形からは要害としての住吉城の旧状は全く想像することもできにくい。今は埋立地から正覚寺下を通り、材木座に通ずる飯島トンネルも開通した。

海前寺西側崖に大きく2個ならんで開口するコンクリート巻のトンネル状のものは戦時中作られた洞窟砲台(註4)のあとであり、その左上方に小さく開口するものは「げんじがやと」南東側尾根先から通ずる機関銃陣地である。住吉神社南東側から「げんじがやと」に通ずるトンネル路は閉塞されて使われなくなっているが、このトンネル東壁の一部が崩されて、その東側に作られた軍防空壕に通ずる交通壕に通じている。

5. 城 の 沿 革

小田原記に「早雲小田原には子息新九郎をとどめ吾身は松田大道寺以下の軍勢を引率し、高麗寺山并に住吉の故城を取立てて籠る。」と記す「故城」について従来考えることができなかったが、今回調査によってその遺構が再確認されたことから、これが名越切通を中心とする鎌倉城防禦施設としてこの大切岸の一環であり、名越切通と同時に小坪坂切通防衛として造営された小坪坂要害のあとであると解して誤りなきものと認められるに至った。したがって「故城」は名越切通を中心とする仁治の築城工事によって造城されたものと判断されるに至った。すなわち当城は永正7年(1510)

上杉顕定の家老長尾六郎為景が逆心をおこしたとき北條早雲がこれに加担し、相模へ出張し、住吉の古要害を取立てて城郭としたと記されたものにあたる。しかし早雲はこの城をいくばくならずして捨てている（小田原記）。後、三浦道寸の城となったらしく、同9年三浦道寸は相州岡崎城に居たが早雲に攻められて落城、退いて住吉城を守ったがいくばくならずしてこれも落され、三崎の新井城に退いたと記されている（小田原記）。

6. 住吉城正面別遺構

住吉城は急峻な山腹にとりまかれた天然の要害と考えることのできる丘陵先端に位置し、かつ海にのぞむ。鎌倉後期には名越切通を中心とする鎌倉城防衛の一環としての要害地であった。北條早雲がそれを取りたてて新戦闘に相応する防衛構築をしたと考えられるが、いくばくもなくこれを捨てた。このときどの程度防衛構築をしたかは不明である。三浦道寸がこれを取りたてて本拠新井城の出城とし、多くの防禦曲輪をめぐらした。これができ上がった時点で住吉合戦があったと考えてよいのではあるまいか。その防禦曲輪が如何ような部分にどのように残っているかを確実にしようとしたのが今回の調査である。攻撃正面は防禦正面でもある。地形上攻撃が（イ）南西正覚寺谷方面と（ロ）北東尾根方面と、それにつづく谷間の（ハ）「うばがやと」方面と（ニ）南東鷲が浦方面とが考えられる以上、それら各正面に対し防禦側でも当然最大限の防禦工事をしているはずである。城址調査としては如何なる防禦遺構が各正面に対して残っているかをあきらかにしなくてはならない。さらに何れかの正面が破られた場合、最後には城主邸館所在の本丸が攻撃されることは当然である。本丸である（ホ）「げんじがやと」の防衛遺構もあきらかにされねばならない。

（イ）正覚寺谷正面

地形と古道

地形をみるに光明寺背後の丘陵は北東から南西につらなり、扇山（標高65m）で海岸に達し、南に折れて小坪で終るものである。現状では海にのぞんだ扇山の西側は絶壁状に切りとられている。明治15年測量2万分1地形図「小坪村」および「雪下村」をみると、北西部分は急峻な山腹になっている。現在小坪トンネル北西口わきからこの山腹を斜に光明寺裏山に通ずる新道が構築されており、この道の頭上にあたる山腹以下が絶壁状に切りとられており、道下部分も戦後の宅地造成でこれまた絶壁状に切られたから、現状でみるかぎり、この丘陵の北西山腹は扇山西側山腹とともに絶壁状である。しかし住吉城当時の山腹状況は急峻ではあったが絶壁ではなかったといえる。

扇山西端から南西にのびる下り支尾根が正覚寺前方海岸にのび、正覚寺谷の北西側を抱き、扇山から南にのびた尾根から分かれた支尾根が正覚寺背後を東から南へめぐって抱いて正覚寺谷を形成している。正覚寺の南側にのびる支尾根は正覚寺の東後ろにある住吉神社の背後から分岐し、南東隣にある「げんじがやと」との間にのびた支尾根である。この支尾根の先は海に達し、先端は絶壁

となる。かくて正覚寺谷は扇山西端岸下と海との間にせまい交通可能な部分を前面とし、南西に谷口を開くふくろ路形の小谷であり、谷内は背後丘陵の二つの支尾根の間にある急な傾斜地である。

古東海道は由比が浜・材木座浜を通過して扇山西端下に達する。光明寺背後丘陵山腹はきわめて峻険にして丘陵を越える路はなかったから、扇山西端下で岩上にのぼり、扇山から南西にのびた支尾根先をめぐる正覚寺谷に入る。正覚寺南側支尾根は海に達し絶壁となって通れないから、路は正覚寺谷奥にのぼり、扇山から南西に下る支尾根のかなり上方から斜に北西にのぼると扇山頂上に達する。扇山頂上尾根西縁を北東に進み67m高地の北側尾根を下り、南折して「うばがやと」に下るものであった。この古道は源平盛衰記の由比が浜合戦のころも同じだった。北條早雲対三浦道寸合戦の時は古道は城中を通ることになるから使われず、名越切通路が使われていたはずである。

唯一の交通路であったこの古道を中にとりこんで城郭としたのが住吉城であったから、鎌倉側から住吉城を攻める路としては正覚寺谷正面しかなかったのである。したがって防禦側としても正覚寺谷防禦が最重要だったはずである。正覚寺における防禦遺構を現地地形からみると次の如くである。

正覚寺谷の遺構

正覚寺石段下に幾らかの平地（もとはずっと狭かったと記憶する。海側に高い土塁状部分があったと思うが）があり、海に臨む。この地の標高約10m。今は前面が埋め立てられたから、旧地形は想像できないが埋立以前までは石段下の平場前面は絶壁であり、直接波がうちよせていた。したがってこの部分は高さ10mばかりの自然の切岸であった。材木座海岸からは正覚寺西側にある扇山支尾根裾と和賀江島基部にあたる岩鼻との間にあるせまい部分が唯一の攻撃路であるから、おそらくこの部分に第1防禦線がおかれたはずである。空堀・土塁が作られ逆茂木が嚴重に構築されたと考えねばならぬが、現在民家群所在地であり、遺構の残存は考えられない。

正覚寺石段下から路が北東向に谷奥に通ずる。これが残存する古東海道の一部である。この路の左側にある扇山支尾根裾は少しひっこむ形になるから、正覚寺境内はこの路に対して正面の防禦陣地である。石段は谷出口の右尾根先にあつて南西面する。正覚寺境内は石段下からの高さ約5m。石段右方は正覚寺南東側墓地であり、「げんじがやと」との間にある支尾根末端部の南西先端が墓地東側をさえぎるがその高さ約4m。上面は小平場である。この墓地北東側から正覚寺東側にかけて墓地（約1m高くなる）がつづき、東から南東にかけて前記支尾根の西側山腹を高ききりとなっている。東側の切りとった部分は高い切岸（高さ約6m）となり、支尾根を削平した平場（5m四方くらい）が上にある。この墓地北東側に石段があり、上の住吉神社に通ずる。墓地と石段上平場との間は高さ約5mの切岸となる。石段上平場は東西約20m、南北約10mの平場であるが、西端はひどく狭くなる。この平場西半部北側は背後尾根から南西にのびる小支尾根先になる。この中段平場の中央にさらに北東方に向う石段があり、上に住吉神社社殿のある上段平場がある。両平場の間は高さ約5mの切岸となる。平場周は山腹を切りとった崖となる。石段の東側にある中段平場の東半部南縁には高さ約1m、下幅1.5mの土塁が切岸上に一直線に残る。土塁の東端から墓地東側切岸上の平場につづく狭い平場がある。その平場の北東側約6m上に支尾根先の平場がある。土塁末端の東側は支尾根側面切崩し部につきあたる。ここに崖をくりぬいたトンネル（第3洞道）があ



図 3 住吉城址実測図

り、「げんじがやと」に通ずるが今は柵を作って通行止になっている。住吉城当時からの通路であるという。この支尾根は「げんじがやと」との境をなし、頂面が長い平場となり、その南西端は少し高くなり、「物見」となる。前記支尾根先平場がそれである。中段平場の西端がひどく狭くなることを前述したが、この部分の南西半部がこの平場から谷奥にある路（古東海道の残）にむかって幅1mほどの西下り路として長く作られている。住吉神社のある上段平場は東西約20m、南北約15mの平場であり、周は背後丘腹を切った崖（高さ約8m）となる。社の東側（右）岸上は「げんじがやと」との境の支尾根基部であり、頂面は平場となる。社殿の右後ろに背後尾根をくりぬいて向側（ぼんばたけ）に通ずるトンネル（第2洞道）がある。

住吉神社中段平場西半部の南側を西に下る幅1mの路が狭くなった中段平場西端下を通りこすと北側（路の右）は高さ約5mの切岸となり、上に広い平場があり、民家群所在地となる。民家群の西側を正覚寺石段西側を谷奥にのぼった古道がかなり急傾斜で通っている。古道の左右側は切通状となり、上に平場（民家）がある。道の左（西）側は扇山から西南にのびた下り傾斜支尾根裾であったが今は幾段にも削平されて多くの民家がつらなる。この支尾根山腹にも当然切岸をもつ平場が幾段も存在したと考えるが今となってはわからない。谷奥の路は左にカーブしてさらに上がる。路の右（北東）側は高さ約3m～4mの切岸となり、上は広い平場（現在畑）となる。平場の北東側に高さ約3mの切岸があり、上面は平場となる。平場は背後尾根側面に作られた東西に長い平場（幅3m～4m、長さ約25m）で東端に土塁の名残（高さ約0.8m、幅約2.5m）がある。切りとった北東側尾根側面高さ約4m。路はこの平場の西を大きくS字状にうねって上り、尾根側面を切り立った岸につきあたり、トンネル（第1洞道）となり、丘陵北側に通ずる。このトンネルはもとからあったともいい「げんじがやと」が邸地になってから作られたものともいい明らかでない。

前記平場（現在畑）下の路左（西）側は幾段にも大きく切りひらかれて「日本光学テント村」とよばれる宅地となる。この部分すなわち扇山西南支尾根が宅地として削平される以前の地形を考えると、このあたりから支尾根山腹を斜に扇山にのぼる古道があったとしても決して特に急な山腹路ではなかったようである。

以上細部にわたって平場と切岸の残存状態をのべたが要約すると谷奥にのぼる古道の左側にあった急傾斜の扇山南西支尾根部分が旧状を全く知ることができないまでに宅地化されてしまったが、明治15年測量地形図では道沿いに民家2～3軒が点在するだけで、尾根側面は削られていない。古道の右側にも民家はあるが部分的に削平はあっても大きい変化はないように見える。谷奥トンネル（第1洞道）前方の平場と切岸は古道を守る最後の場所として存在したと考えられ、この状況からすれば、左側支尾根を斜にのぼる古道は平場を通るようになっており、古道の下側と上側には切岸が存在したものではあるまいか。

古道の右側は旧地形が保存されているものの如く考えられる。最も広い正覚寺境内は攻撃真正面にあたり、高さ約5mの切岸をめぐる正面平場であり、北東側に住吉神社のある小谷奥があり、境内の周に約5mの高さをもつ崖（切岸）をめぐる。この平場の北東側には背後尾根からの支尾根が長くのびて外壁となり、内側は切り立った崖となる。尾根先には三段の平場が存する。正覚寺

谷の北東奥は二段の平場となり、各平場隅には尾根をくりぬいたトンネルがあり、住吉城当時のものと伝えるものが多い。谷奥まで退いた城兵が脱出する路であろう。要するに古道にそって高い切岸をもつ幾段もの防禦平場があったとすることができる。住吉神社平場も古道奥平場も最奥の平場は何れも尾根にきわめて近い場所になるから、脱出は充分可能であったであろう。

正覚寺谷背後尾根

扇山から南に折れて住吉神社背後（げんじがやと北隅）に至る約200m間の尾根は正覚寺背後尾根である。

扇山より南に折れた丘陵はすべて丘陵尾根頂を削平しており、正覚寺谷に面する西側山腹は自然側面のようにみえるがきわめて急峻であり、よじのぼることすら困難にみえるから、人工を加えたものであろう。反対側（東側—逗子側）山腹は尾根削平部縁ぎりぎりのところから切岸として垂直に切りとったとみられる形のものが多く、その下約5mのところ幅8m乃至10mの平場が山腹にそって長く（約50m）つづく。平場の外縁は切岸となり、さらにその下に長い平場がつづく部分がある。遺構が遺残する尾根状況を扇山から南にむかってのべると次の如くである。

扇山南端から尾根はやや急な下り傾斜で約10m、さらにゆるい傾斜で約10m下る。この間幅約3m。扇山との高低差3.5m。左（東）山腹は高さ約6mの切岸となり、下に幅8mほどの平場が山腹にそって作られている。尾根削平幅約2m。長さ約50mにて東縁が急に切りこんだ形となり、尾根削平部幅約1mとなり、下り坂となる。約30mで尾根上の瘤につきあたる。瘤の高さ約8m。瘤は楕円形。中央幅7m、長さ15m。南に向って低くなる。尾根右（西）側は急峻に切りおとしてある。瘤部の左（東）側は上下2段の平場（下平場幅3m長さ18m、上平場幅2m、長さ23m）となり、扇山からおりてきて瘤につきあたる部分から尾根削平部は瘤上を通る。瘤東側面にある上段平場の南東部は高さ約1mの切岸を作って東下に幅2m長さ約5mの平場がある。ここから下の平場がある。ここから下の平場への路がある。この小平場縁は高さ3mほどの切岸となり、その下に山腹にそって作られた平場がある。

瘤の東側をめぐったせまい平場は幅2mから幅1mに減ずる。瘤部の南端は下り傾斜（幅1m、長さ約10m）となり、平らな尾根削平部となる。幅1m。この尾根削平部の東側は高さ約1mの切岸となり、瘤の東側をめぐった平場が幅1mとなってつづく。すなわちこのあたりは幅1mのせまい平場が高さ1mの切岸をへだてて上下二段に走るもの。このあたりの東山腹には幅7～9m、長さ60mにわたる平場があるが尾根の小支尾根の突出によって2か所で切断されている。約20m南で削平部は西に大きくカーブする。このあたり切岸高約2m。下側削平部2m。このあたり東側切岸（高さ約4m）下に幅5m内外の平場が山腹にそって長く（約40m）遺存する。

大きくカーブした尾根削平部が再び南走するあたりで上下削平部間の切岸がなくなり、幅約2mの削平部となる。この部分に深さ1.5mの空堀が作られている。空堀底長さ約1m。横幅約7m。空堀の前後は高さ1.5mの切岸となる。空堀の南は幅3m乃至5m、長さ約17mの長楕円形平場となり、その先は「げんじがやと」背後丘陵との間の空堀で終る。この平場標高約67m。この北西山腹下約20mに正覚寺奥の住吉神社の平場がある。

(ロ) 北東尾根正面

正覚寺谷奥から西に斜に扇山支尾根をのぼって扇山西端に達した路は扇山北東方にのびる尾根伝いに切通の西端(第一中学校南側)に達し、切通を東に通って「うばがやと」に下る旧道が明治15年測量地形図2万分1「小坪村」にかかっている。

光明寺裏山一帯の丘陵は山腹急峻のため、鎌倉側からのぼる路はなかった。したがって光明寺背後からの攻撃は困難だったが、時間をかけてじわじわ兵員を送りこむことは不可能ではなかったにちがいない。すなわち早急にはこの方面の攻撃はないとしてもいずれは攻撃面になるべきものだったと判断されたから、北方からの攻撃に対する防禦遺構は思ったより嚴重に残っている。深い切通以北は宅地造成によって失われたから全く不明である。

この小坪切通の西面は中学校建設工事で大きく切りとられた。小坪トンネル西側から扇山東尾根山腹を第一中学校に通ずる新道から中学校西南端を通して、切通の西端に通ずる新道が切通北方にできた団地の中を北東に通じた。今この道を「小坪坂」という。小坪坂上(小坪5丁目10-25)宅造地工事によって、旧小坪坂切通の北面は削平され、切通の南側に旧切通南面切岸部分を高さ約2m残して埋められたから、北側切通のあった切通北面部分は消滅した。現在残るのは南面8mくらいだがもとは更に10mくらい西までのびており、今西側に広い平場があって南にのびているが、以前は西側に幅3mくらいの平場が、切通南上平場の西下にある、山路はこの平場を南にすすみ、右折してから尾根にのぼり、尾根を左にすすんでから扇山の方に通じていたという。この切通の深さは5~6mあったと記憶する。

扇山北東尾根

扇山北東尾根は切通まで約250m。旧切通部分の南方にこの尾根最高(標高約67m)の部分があり、北東・南西・南東・北の十字形に尾根がのびる。北東尾根は切通にむかって低くなり、5段の大小切岸を北方にむけ、その上に各平場がある。切通上平場の北西側下には背後最高嶺から北にのびる支尾根の北東山腹にある平場の一部がのびており、東側約5m下には山腹にそってのびた狭長な平場(今墓地)が南にのびる。切通南上平場と南側第2平場との高低差は約5m。その南につづく平場は何れも切岸高約1mで67m高地に達する。

南東側支尾根は67m高地から南東方に支尾根がでて、その末端裾まで約150m。67m高地南東端から尾根は下っているが約45mの間は尾根頂が幅3m乃至5m削平されている。この先約50m南東に尾根の高所があり、この間は約5m低い鞍部になる。南東部高所は削平されてはいるが特に防禦遺構はない。これらの尾根頂削平部の縁は山腹に対して急峻であり、攻めのぼることは困難と思われる。

北支尾根は67m高地西端から直角に北方に支尾根がでている。支尾根先端は扇山から北東にのびた北東尾根(本尾根)の西側山腹にある新道が第一中学校庭隅に達し、分岐して校庭隅にそうて旧小坪坂切通にむかって彎曲する小坪坂(現在の名称)になっているが、支尾根はこの道の分岐部まで達している。67m高地西端からの支尾根長約100m。この支尾根の西側山腹は急峻であるた

め、尾根頂が長く削平され、その西縁が切岸状に急峻になってはいるが、その下方に防衛平場は全くない。それに反して東側山腹には多くの平場が連続する。この面が攻撃正面になることを予想して構築された防禦面であることがあきらかである。この防禦面は前述した67m高地から旧切通にいたる遺構のある下り尾根と北支尾根北東面との間にある幅広い谷にあたる。

北支尾根頂は基部から約20mの間は幅約3mが削平されるが、13m辺から尾根西縁に土塁が15m余にわたって築かれるから尾根削平部幅は半減する。土塁中ほどで、削平部はさらに狭くようやく通過できるほどになり、この部を通過すると東縁にも土塁が長さ約7m築かれ、通路は両土塁間をようやく通ることになる。土塁の先約20mは幅4～5mの平場となって終る。平場先端北東山腹に幅1m長さ10mほどのせまい平場があり、その下に底辺25m高さ13mの三角形平場が突出して北支尾根頂の防禦平場は終る。この三角形平場の基部から上の平場の東山腹にむけて幅1.5m長さ25mの狭い平場が作られており、その先(南)に幅8m長さ20mほどの平場が山腹に作られている。この平場の上は67m高地西端からでた北支尾根頂を削平した幅3m長さ20mの削平頂にあたるが、この間の山腹に幅3m長さ約18mの平場と幅4m長さ約15mの平場とが弧状にならんで存する。長さ約18mの平場の下には幅2m長さ約10mのせまい平場が付随する。北支尾根先の三角形平場と前記幅8m長さ20mの平場との下方山腹には北西から南東の方向に別の平場群があって、この部分の防衛を強化している。すなわち三角形平場の南東下には大きい半月形平場(弦長約25m、半径10m余)があり、その南東に長さ約8m奥行約6mの矩形に近い形の平場、その南西から南東にかけてこれを抱く形で長さ約30m幅2m～3m(広い部分で5m)の長い平場があり、その南東部分は東に彎曲して旧切通の北側にまで長くのびている。この上部に接して長さ約20m幅3mの楕形平場があり、さらに上方に木の葉形の小平場2個が存在する。

これから考えて、これら十字形尾根の交点である67m高地が北東尾根先端の防衛拠点であったことは地形上からも遺構上からも充分考えられ、この拠点が突破されれば扇山までは細い尾根路の連続があるばかりで、大挙攻撃することはできない地形ではあるが、くいとめることは不可能であったろう。

67m高地から扇山(標高65m)に通ずる尾根が主尾根である。尾根頂を削平して交通路とし、尾根両側面は切りおとし急斜の山腹としているから、攻めのぼところはまず不可能である。67m高地頂南西端から急傾斜に低くなって南西に尾根がのびる。削平尾根幅は大部分幅5mほど。最大6m、最小3mある。約20mにして南東に折れ、15m進むと切岸ではばまれる。高さ1m。その上の平場幅3m長さ5m。この南側に高2mの切岸の上に三角形の平場幅3m、奥行5m。平場の南西側に高1.5mの切岸があって上が削平していない尾根で中断する。このあたりから南に分かれる小支尾根(先端裾まで約100m)があり、尾根頂部が削平されている。削平のみられるのは基部から約40m。幅2～3mである。

路を中断した尾根は瘤状に高くなり、その南側は低くなって尾根鞍部となる。鞍部は尾根路から1.5m低くなり、空堀となる。鞍部幅3m長さ4～5m。このあたり南東山腹下約15mに谷奥があり、三段の平場がある。鞍部より南西方に進む尾根は約5mで高さ0.5mの段差をもって上の平

場となる。平場北幅3m、南幅6m、長さ5m。この南の切岸高1m。切岸上は長さ20m、幅5～6mであり、この先は北幅5m、南幅3m、長さ約20mの平場。切岸1mをもって再び鞍部となる。平場幅3m、長さ6m。鞍部の南に高1mの切岸。上に幅5mほどの平場あり、鞍部との境に幅1m長さ2m高さ0.8mほどの土塁が残る。(土塁東端を崩して今は上下段の通路としている)。鞍部東側山腹約5m下に幅南端4m、北端1mほどの平場が山腹にそうて作られ、扇山の東下達している。平場南西端からやや緩傾斜の山腹状となり、扇山に達する。この部高低差約6m。扇山頂上は広い平場となる。平場の大きさ西側14m、北側17m、東側6m、南側18mの四辺形状である。

尚これら北東尾根の西面山腹はきわめて急峻な自然山腹をなし(明治15年測量地形図によって考える)、攻めのぼることはきわめて困難である。現在山腹の下半部は新道工事で切りとられて絶壁状になっているが、絶壁上と新道西側の旧山腹をつなぐ傾斜を考えても、これを攻めのぼることはきわめて困難である。されば、尾根西側山腹には防禦平場の遺残は全くない。これに反して東側山腹には前述南東支尾根基部南側小谷は、山腹は急峻だが谷底は傾斜ゆるやかである。したがって谷奥に面する尾根山腹には谷を横切り、数段の平場が残っている。

(ハ) うばがやと正面

扇山から南東にのびて小坪寺背後に達する尾根を細かくみると、扇山から正覚寺谷住吉神社背後まではほとんど南走し、「げんじがやと」背後になる部分で南々東に折れ、さらに「げんじがやと」背後尾根南々東隅でさらに折れて南東々向になって小坪寺背後に達する。したがって鷺が浦に面する山腹面は南々東向であり、背後「うばがやと」に面する山腹は北々東向となる。「うばがやと」というのは東方砂山天王山から鎌倉第一中学校の南東につづき、扇山をへて正覚寺背後・「げんじがやと」背後・小坪寺背後とつづく環状丘に抱かれたものであるから、「うばがやと」に面する山腹というのは扇山から北東にのびる尾根の南側面、扇山から住吉神社背後までは東側面、「げんじがやと」背後までは北東側面、小坪寺背後までの間は北々東面となる。したがって住吉城遺構記述はきわめて複雑にならざるを得ない。尾根頂面遺構記述に際し、尾根側面の遺構については若干ふれたが、以下は「うばがやと」内からの攻撃に対する防禦面として記述する。近年の地形変更によって不明になった部分や、宅地造成によって不明になった部分が多いから、以前の調査を基とし、簡略に記述する。

「げんじがやと」背後南々東隅(63m高地)で急峻に切りおとされているから、ここから小坪寺背後尾根まで一直線に見通すことができる。この見通しのきく尾根上面状況は次の如くである。

「げんじがやと」背後丘の南々東隅(63m高地)で切りおとした山腹高約5m。この下から尾根は南東々にのびるが、尾根頂にはすべて人工を加えている。長さ約15m間は頂幅4～5m。この間尾根を2か所で大きく掘り切っている。これにつづく尾根は長径17m短径8mの長楕円形状平場となり、その先に弦長30m、半径15mの不正半円状平場がつづき、その先に約1m低くなった菱形に近い平場(長軸約70m、短軸約15m)がつづく。平場北西隅にそうて不正半円形平

場南端との間に高さ約1mの土塁約10mがあり、これにつづいて本平場の南々東側全体に高さ約1m、長さ約30mの土塁がある。本土塁は敵が「うばがやと」面から攻めのぼった場合にも、鷺が浦面から攻めのぼった場合にも防禦土塁として使うことが可能である。63m高地下からこの平場南々東端まで約100m。この部分に「うばがやと」から鷺が浦へ越える路が通っている。以上のべた尾根につづくこれら平場周には高さ1.5mから2mほどの切岸をめぐらす。

尾根平場はこの路の東々南にさらにのびる。平場は不正形の平行四辺形。長さ約50mで幅約30m。この平場の南側隅にも前記と同じような高さ1m余の土塁が長さ約60mにわたって存在する。平場の南々東から北東にめぐって高い切岸があり、その下にこの平場を東から北にめぐって幅25m（北端幅45m）の彎曲平場（彎曲の長さ75m）が存在する。この平場以東は自然山腹となりがきわめて急峻である。尾根を越える路からこの平場端まで約100m。

これらの平場は前述したこの尾根越路の東側である。この尾根越路の東側における平場は何れもきわめて広いものであり、前記彎曲平場の北東側下方に、下のものほど面積を増した4段の広面積平場が雛壇状に配列している。平場毎に高い切岸をめぐらす。最下段平場下切岸の高さは約10mにおよぶ。

尾根越路の西側にある前記弦長30m、半径15mの不正半円状平場とその先に一段低い菱形に近い平場（長軸70m、短軸約15m）があり、その東側に尾根越路のあることをのべたが、尾根越路の北西には菱形平場の北東々側切岸の下に底辺20m高さ40mの三角形平場があり、この北側に幅4m（東端幅8m）、長さ40mの細長い平場が付随し、菱形平場と半円状平場との北東側切岸下には幅3～5m、長さ40mの細長い平場が付随する。その北東側から北側にかけては高さ約8mの切岸をめぐらし、中段には前述長楕円形や不正半円状平場の北中腹を通った幅1mほどの連絡路が通じている。これらの下に横70mたて70mほどの平場があり、さらにその下にこの平場を抱くような形で広い平場がめぐっている。平場の北側は北東から南西に深く入りこんだ谷に面する（この谷には秀吉邸トンネル北東口への通路がある）。これら広い平場群所在地を「ばんばたけ」とよぶ。

小坪寺背後尾根上からその北東側山腹には広い面積をもつ平場が連続することを記したが、城郭としてそれら広い平場は兵員の宿泊および休養のための陣所として、また食糧の他必要品倉庫位置として必要な平場である。高い部分にある平場が高い切岸をめぐらしていることや、防禦平場と思われるものをめぐらしていることからそれが考えられる。

「げんじがやと」背後尾根の外側については尾根背面の高い切岸下に狭く長い平場があり、さらにその下に幅の広い長い平場の存在を記したが、この平場の南東端から幅1mほどの路がその下方山腹を山腹にそって長く走る幅1mほどの山腹路に通じ、これを越えてさらに下方にある広面積の平場に通じている。この幅1m路の南東端は前述尾根越路の西側に接する三角形平場に通ずる。この1m幅山腹路は「げんじがやと」背後山腹の幅広い平場の下をめぐって北上し、住吉神社背後トンネル（第2洞道）の東側出口前の平場に通ずる。この平場は2段の切岸を伴う3段の平場となって秀吉邸トンネル東口のある谷の北側尾根に位置する。この3段平場の西北上部には住吉神社背後

尾根上平場との間に山腹にそうて構築された幅3～4mをもつ、長さ約40mの平場がある。この平場の北に幅7～9m長さ約60m（尾根わきの小支尾根によって2か所でぎられている）の平場のあることは正覚寺谷背後尾根状況で記したが、この平場下方山腹にとびとびの状態で櫛形平面をもつ小平場（弦長10m・15m・20m）4個が散在する。この部分の北方に西から東へ突出する小支尾根がある。正覚寺谷背後尾根記述に際し、高さ約5mの楕円形瘤（長さ15m、幅7m）の存在を記したが、この瘤は上記小支尾根基部である。小支尾根は瘤から東々南にのびるもので、小支尾根基部は瘤頂から25mほどのところで深く掘りきられている。掘切部先に長さ10mほどの尾根を残し、その南北中腹に幅2mほどの通路をつくり、尾根先下の平場との間を切岸でさえぎる。尾根先平場は幅6～7m、長さ25m。この平場の西北端は上の切り残り尾根先の山腹にめぐって幅3m長さ15mのびる。尾根先平場先端には2段の切岸を作って尾根先にそって作られた半円形平場（幅15m、長さ7m）にのぞむ。両平場間に幅2m長さ13mほどのせまい防禦平場が付随する。

小支尾根基部切通北側は山腹にそうて北西から南東にのびる平場につづく。南東のものは前記小支尾根先平場の西北端平場の下側山腹にのびる平場であり、北西にのびる平場は正覚寺谷最奥トンネル（第1洞道）北東出口の堀割によってたち切られる。この平場幅8m、長さ25m余。トンネル北東出口の堀割の北側には正覚寺谷背後尾根切岸下の北東側山腹をめぐる幅8m～10m、長さ55m余の平場につづく。この第1洞道が後世掘られたものとすれば、これによってたちぎられた両平場は長さ85m余あったものであり、小支尾根下の平場への延長を加えれば100mにおよぶ。

長さ55m平場の北東山腹には平場が数段に重なり、この部が特に厳重な防禦地点と考えられていたものと考えられる。長さ55m平場の北側には扇山東側山腹にそうて作られた長さ35m平場がある。

この北東側は南向の谷間であり、南にのびる短い支尾根をへだててその東側にも南向の谷がある。両谷間には数段の平場がある。

以上が「うばがやと」に面する山腹にのこるすべての遺構である。それらは正覚寺谷背後尾根、「げんじがやと」背後尾根につづく長大な防禦遺構であり、特に扇山以南にのびる全尾根の東側から南東側をほとんど垂直に切った切岸は名越切通につづく大切岸と同じ手法であり、おそらく仁治の工事に名越切通防衛工事の一環として造営されたものであろう。

（二）鷺が浦正面

小坪寺下一帯の海岸を鷺が浦といった。前面海岸一帯が埋めたてられたから海岸位置が不明になったが、小坪寺前面下方に広い道路が彎曲して海前寺下を崖にそって北西に走っている。この広い道が大体もとの海岸線だったようである。この海岸線に面した一帯は海上からの上陸軍によって攻撃をうける正面であるから、防禦軍がどのように防禦構造を遺残しているかをみなければならない。やや緩傾斜の中段山腹以下は民家群所在地であるが尾根から中腹まではきわめて急峻な山腹である。この山腹の遺構は次の如くである。

「げんじがやと」南東側支尾根の遺構をのべた中で、支尾根外側山腹はきわめて急峻であり、約 5 m 下に山腹にそうて作られた長い平場が連続する。物見所に近い尾根外側下には幅 4 m、長さ 35 m の平場があり、その北側山腹に幅 2 ～ 3 m、長さ 40 m にわたり山腹にそうて彎曲した平場があって、63 m 高地南下につづくとして記したのは鷺が浦面の北西端山腹の遺構である。この彎曲した平場の東端は 2 か所で掘り切られた尾根平場につづく長楕円形平場（長軸 17 m、短軸 8 m）の南々東下山腹を西から東に通ずる幅 2 m、長さ 30 m の連絡路につづき、前述尾根の長楕円形平場の東につづく弦長 30 m、半径 15 m の不正半円状平場端の南側山腹にある長さ 20 m 幅 10 m の変形矩形平場の西北端につらなる。この平場の南には三角形平場（底辺 20 m 高さ 7 m）がつらなり、さらにその南東側にある三角形平場（底辺 15 m、高さ 5 m）につづき、「うばがやと」から尾根を越えて鷺が浦へ下る尾根越路に接する。これらは尾根平場の南々東側山腹（鷺が浦に面する）にある平場群で、山腹を強行突破する敵軍から尾根平場を守る防禦平場である。その下方民家群所在平場まで、間は急峻な自然山腹である。

尾根越路は鷺が浦に面する急峻山腹を大きく「く」の字形に曲って民家群のある中腹に達する。この路はおそらく住古城当時のものであろう。「く」の字形にこの山腹に通ずる路の左右には大小の平場群が上下にかさなっており、現在は畑地になっている。この急峻山腹に構築された防禦平場を後世そのまま畑地にしたものと考えられるが、後世の開墾畑も混在するかもわからない。

急峻山腹を「く」の字形に下った山腹路は民家群の最高部である。民家は海前寺を西端とし、南面する山腹にあり、中央最高所に神明社があり、境内幅 20 m、この一劃の前面に幅 10 m、長さ 30 m の張出があり、その基部は西に 50 m のびて海前寺墓地（もとの位置に海前寺があったと伝える）に達し、東に 100 m のびて小坪寺墓地に達する。この前面崖（今は石垣またはコンクリート崖。おそらくもとは切崖）高さ 7 m。神明社前面に幅 20 ～ 30 m、長さ 100 m にわたる平場の張出部があり、同崖高 5 m。これら平場の前面に幅 30 m（狭い部で幅 10 m）、長さ 300 m にわたる長大平場があり、崖高約 4 m。この崖下は海岸に直接面した最低平場で幅 20 m から 50 m。海岸との高さ約 2 m。これら平場は西町から中里町におよぶもので、すべて民家群所在地である。すなわち民家所在地は 2 m・4 m ～ 5 m・5 m・7 m 4 段の切崖を前面にした長大平場群であり、その中央最高部に神明社が位置する。神明社所在地がこの防禦面指揮所であり、防禦構造が城郭当時のまま残存するものであろう。背後急峻山腹に「く」の字形に存する路は神明社前平場と同高にあり、神明社の西 40 m にのぼり口が存するものである。

（木）邸館所在地（げんじがやと）防衛

城主の邸館は扇山から南東にのび、小坪寺背後まで達する丘陵の中央辺から少しの間隔をへだてて南西にのびる二つの支尾根にはさまれた小谷「げんじがやと」であると考えられている。扇山・南東裾に正覚寺谷があり、正覚寺谷の南側支尾根が「げんじがやと」北西側支尾根である。「げんじがやと」北東側は扇山から南東にのびた尾根の中央辺にあたり、長さ 30 m をへだてて 2 本の支尾根が海側南西にのび、支尾根は各 80 m ほどで終り、先端は海にのぞむ絶壁状となる。これら 3

尾根に抱かれた谷内は尾根裾を切って内部を広くしたものであり、上下2段の平場からなり、南西側は海にのぞむ絶壁となる。この谷を囲む丘陵の外側は山腹を切岸状に切り立てているから、周辺の防衛地域が破られ、取巻かれた丘陵尾根下まで攻撃軍がせまっても、直ちに攻めこむことは困難であることから、城主も兵員も海側から脱出する時間は充分あったものと考えられる。以下「げんじがやと」内部とこれを取りまく丘陵の防禦遺構について記す。

「げんじがやと」を囲む丘陵の北東側は長さ約30m。標高63m。その両端から支尾根が外開きにのびる。南西側支尾根長約75m。南々西側支尾根長約80m。開いた両支尾根先の距離約80m。したがって「げんじがやと」をかこむ丘陵の形は先開きのちりとり形である。ちりとり形奥部にある平場は台形に近い形をなし、南西側幅45m。北東側幅25m。両辺間隔38m。南西側に約6m低く矩形に近い形の下段平場がある。長さ35m、幅18m。この上下2段の平場はさして広いものではないが城主の邸館所在地としては好適である。下段平場南西端は海にのぞむ絶壁状であるが、もとの南西山腹に幅1m長さ15mほどの狭い平場が付随しており、これを経て絶壁を下る路があったと伝えるが今は平場の大部分が崩壊してしまった。上平場の南東隅と下平場の南東隅とに各1個の大型井戸がある。城郭当時のものであろう。

邸館所在地防禦遺構 ― 背後北東側尾根は扇山から南東にのびる尾根であり、正覚寺谷背後尾根につづくもの。正覚寺背後尾根南端は住吉神社背後で狭い空堀につづく長楕円形平場であり、その先はふたたび空堀となる。空堀の深さ3m、下幅2m。この空堀で正覚寺背後尾根と「げんじがやと」背後尾根とは切れている。空堀部分から南西に低くなりながらのびる支尾根が「げんじがやと」を防衛する北西側尾根となるもの。長さ約75m。尾根頂面は空堀底からつづいて削平され、頂面削平幅2～3m。先端で若干低くなって幅3m長さ10mの平場となる。物見所であろう。物見所の少し手前で尾根をくりぬいた洞道が正覚寺谷奥住吉神社境内から通じている。城郭当時のものと伝える。

空堀底から南西に低くなる尾根の内側は急峻な山腹であり、下半は垂直に切りとられている。外側（北西側）は高さ1m余りの切岸をへだてて下に細長い平場が付随する。南西側幅2m、北東側幅4m。支尾根先の物見の南西側は急峻な山腹となるが西にのびる支尾根先は正覚寺谷の南側にのびる。のびた下り尾根に2段のせまい平場があって正覚寺防衛遺構の一部になっている。

空堀南東壁は高さ2m。「げんじがやと」北東側（背後）尾根も尾根頂が削平されて幅3m、長さ25mの平場となり、南東端が幅約6mとなり、若干高くなる。尾根はこの部分でたち切れ、南東側が急に低くなる。ここからは南東にのびる小坪寺背後尾根全体が見通せる位置であるから、最有力な物見位置であったと考えられる。標高63m。尾根は邸館地と考えられる内部平場から23mの高さにある。尾根北東側山腹は急傾斜に切りとられ、高さ約3m。下には幅2～4m、長さ27mにおよぶ平場があり、縁は垂直に切りおとされ、その下に幅6m～8m、長さ30mの平場があって、その北端は正覚寺谷背後丘陵にある幅4mの長い平場につづく。63m高地南々東隅は急峻に切りとられ、その下にある尾根頂との差は約5mある。

63m高地から南々西に低くなりながらのびる支尾根は「げんじがやと」南東側防禦尾根であり、

ゆるいS字形で低くなり、長さ約80mで終る。先端10mくらい手前から若干高くなり、先端部は短径5m、長径10mの楕円形平場となる。標高60m。北西→西→南→南東と広地域を見わたせる好位置を占める物見所であり、特に南東面警が浦一帯を眼下に見おろせる位置にある。この支尾根頂の削平幅は2～3mであり、S字形の曲り部分付近は幅5mになっている。支尾根内側山腹は急峻であるが、外側はさらに急峻に削られており、攻めのぼりは困難である。外側山腹約5m下に山腹にそって作られた長い平場がある。物見所に近い尾根外側下には幅4m長さ35mの平場があり、その北側山腹には幅2～3m長さ40mにわたる山腹にそって彎曲した平場があって、63m高地南下につづく。この平場南端近くの一部は幅6mの広い平場となり、この部分に「げんじがやと」南東側尾根中腹をくりぬいた洞道の出口がある。城郭当時のものと伝える。出口は西町海前寺背後山腹の高い位置である。この平場と63m高地との中間には幅1.5m長さ20mの狭い平場が山腹に構築されている。63m高地防衛の逆茂木を設置する平場であろう。

以上により邸館地は三方急峻な山腹をもつ丘陵に囲まれた要害地であり。とりまく丘陵外側はきわめて急峻な山腹をもち、高い切岸と長い平場をとまなっており、急激には攻略しかねる防衛施設を備えたものといえることができる。

7. 向 い 城

包囲戦に向い城の存在は当然考えなければならない。住吉城をとりまく周辺の丘陵として伊勢町背後丘陵である伊勢山も、大崎山も、北東方の砂山天王山も位置といい高さといい、向い城として考えられる場所である。

伊勢山は住吉城南東部分を真正面にのぞめる山頂部に位置する。披露山閉地造成以前には伊勢町南東背後尾根先端部には天照大神宮のある窟状部分の北西側に大小2段の平場（当時畑地）があり、その周は切岸になっていた。また天照大神宮の南東200m余に伊勢山とよばれる頂部の平らなかなり広い楕円形山頂部（当時畑地）があり、周が切岸状になっており、その周をめぐる広い平場（小字こしまきー当時畑地）があり、切岸をめくらしていた。これらの地形は中世城郭としての遺構にきわめて似ていたが、今は天照大神宮とその北西部2段の平場を残すだけで、伊勢山およびその周辺地形は宅地造成工事によって失われた。

天照大神宮の南方400mほどに谷をはさんで大崎山がある。住吉城南東面を眼下にみおろす最高地である。山頂部から北西山腹にかけてのみならず、これにつづく山腹に大小平場と切岸が多く残存する。後世の開墾畑と区別することはできないが向い城としての中心的位置と地形を備え、指揮所として最適と考えられるから、おそらく住吉城攻撃総指揮者の陣所であったろうと推測する。

住吉城南東尾根北東面が谷をへだてて面するのが砂山天王山の尾根であった。この尾根は現在では大部分が住宅団地として開発され、城郭遺構の残存を求めることが困難であるが、「うばがやと」に面する南西山腹の高所に2段の小平場と切岸の残存が知られた（小坪6丁目5～6?）。それら

は位置としても方向としても向い城としての遺構と判断される。

8. 考 察

(イ) 古道と住吉城

城は城主が領土を保全するための防禦根拠地である。一旦攻撃をうけた場合、その根拠地を敵の手から防禦せねばならぬ。したがってその時点における攻撃武器と攻撃法に対して万全の防禦ができる施設を備えなければならない。敵は主要路を確保せねば攻撃軍を安全に城攻めの態勢に整えることができない。したがって防禦軍においても主要路を確保することが先決である。すなわち城は主要路確保に最も都合のよい位置に存在することが必要である。住吉城は相模湾岸に位置する。古東海道（奈良時代末までの東海道）は鎌倉前面の海岸を西から東に通じ、鎌倉の東側を南北に連なって飯島岬で終る光明寺背後丘陵を先端で越え、逗子を回り葉山から三浦半島を横断して走水に達し、東京湾を越えて房総半島にわたった。鎌倉海岸東端のどこをどのように越えたかは全く知られていなかった。

光明寺裏丘陵を越えたことは想像されるが、当時の古道そのままは現存しない。源平盛衰記の由比が浜合戦（畠山重忠と和田義盛との合戦）記事中に三浦義澄以下の騎馬が小坪坂をかけ上って小坪峠上から合戦をみおろした状景がある。物語だから全部を信ずるわけにゆかぬが記事は地形的に違っていないから、浜から小坪坂上にのぼる路が存在したと判断される。山上に小坪峠があった。その路がおそらく古東海道の名残と考えてよからう。その古道が最も古い形で記録されたと考えることのできる資料は、明治15年測量の陸地測量部2万分1地形図「小坪村」「雪下村」がそれである。必要部分は両図の合せ目になっているが、光明寺谷から後ろ山にのぼる路はない。付近のどこかを越える路もない。しかし正覚寺西側から谷奥に進み、背後支尾根中腹から斜に扇山にのぼる路が記されている。扇山尾根の西縁を北東に進むように記されている。もと鎌倉第一中学校庭の南端になっているところに尾根を北西から南東に切り通した道があって、材木座海岸から光明寺裏山にのぼる山腹の新道につながっていて、「うばがやと」に下る道があった。扇山を通った古道がこの切通の西側で合致し、「うばがやと」に下るものだったのである。古道が正覚寺谷奥から扇山を北東に越える尾根部分はすべて住吉城内になっている。現在正覚寺西側を谷奥にのぼり、谷奥からトンネルで丘の北側にぬける路があるが、「小坪村」地形図には記載がなく、谷奥から現在日本光学テント村と記されている山腹切崩部分あたりから左（西）に折れて急な山腹を斜に扇山にのぼり北東に折れて尾根の西寄り部分伝いに北東尾根最高部（67m高地）の西側尾根から山腹に下り、「うばがやと」に下る路として右（東）折し、尾根を横切るものであった。

現在正覚寺谷奥付近から扇山にのぼる路はない。谷奥のトンネルは江戸時代から存在したとも、「げんじがやと」が邸地となり通行が禁ぜられてから村人がほりぬいたとも伝え（松井鶴松氏談）、

確たることはわからない。日本光学テント村部分が大きく切り崩されたとき、山越旧道部分を含めた山腹が切りとられたものではなかろうか。山腹をのぼり、山頂を通る路は住吉城となった時点で防禦構築工事で大きく変形してしまったものであろう。かくて「うばがやと」へ下る切通までの尾根路は消滅したが村民の通る路としては残っていたらしい。「うばがやと」に下る切通路は近年まで旧道とよばれて切通の形でこっていたが、中学校建設にあたり切通以北が切りとられ、更に住宅団地造成に際し切通路も失われた。住吉城構築のころもこの古道は村民の通る路としては使われていたであろうが、主な交通路としては既に鎌倉末期には現国鉄横須賀線名越トンネル上を通る名越切通路が公道として使われていたはずである。

(ロ) 城の沿革からみた対敵正面

小田原記に「早雲が住吉の故城を取立て籠る」と記した故城（古城）については従来考えることができなかったが、昭和54年実施された「史跡名越切通保存管理計画策定事業」によって鎌倉と逗子の境にある南北に連なる丘陵の逗子側に面する尾根を垂直に切りたてた大切岸が名越切通の北方約800mにわたって延々残存するものが単にこの部分だけでなく、さらに南方にも延々連続したと推察されるに至り、住吉城址尾根の切岸もその一部と推察されたが、中間部分にある丘陵がすべて広地域団地造成によって削平され湮滅していたため、これを確認できなかったが、住吉城址における尾根の逗子に面する側を丘陵尾根にそって延々切岸としている姿が、今回調査によって再確認されたことから、これが名越切通を中心とする鎌倉城防禦（名越切通の場合北條氏（泰時）の三浦氏（泰村）攻撃に対する防禦）施設としての大切岸の一環と解して誤りなきものと認められるに至った。光明寺背後丘陵先端を西から東に越える古道（古東海道）は中世にも使われていたから、名越切通を中心とする鎌倉防禦のための要害としてはこの古道も嚴重に防禦されねばならぬことは当然だった。かくてこの山越路（小坪峠）は逗子側から容易に越えることのできぬ城塞だったはずである。その城塞防衛の一環としての大切岸が住吉城跡の尾根に残存するものである。すなわち「故城」は名越切通を中心とする仁治の築城工事の一環として造営されたものと判断されるに至ったものである。

次いで早雲が永正7年（1910）住吉の古要害を取立てて城郭としたとき、当面の敵正面は鎌倉側にあったと考えてよかろう。しかし間もなく早雲はこの城をすてた。後、永正9年岡崎城をのがれた三浦道寸が住吉城に籠っている。この時の対北條合戦は当初は鎌倉側であるが結局は四周から攻撃を受けることになるかと判断されていたとすることができるとする。

(ハ) 攻撃正面と防禦正面

城を攻撃するに際しては攻撃の正面になる部分が当然存在する。地形と戦法と戦術とから考えられる攻撃正面は当然防禦軍が予想する防禦正面であろう。どの正面が主攻撃正面になるかはその時の戦闘次第である。したがって攻撃が予想される正面に対しては十分な防禦態勢がとられる。中世城郭の戦闘における防禦の中心をなすものは幾重にも準備された切岸と平場であろう。空堀と塀・

土塁のほか多くの櫓がこれに付随し、逆茂木が重要部分に引きならべられ、攻撃軍をなやます。逆茂木は平常全城域に茂らせておいた樹木を切りたおし敵攻撃が予想される地点の平場や切岸に接して、敵方に梢をむけてかきならべるもので、攻撃軍としてはきわめてやっかいなものである。これに加えて防禦軍が一方的武器として使うものに石がある。大小多くの岩塊が城内に準備され、これを投げおとして強大な威力を発揮する。戦国期には大岩のほか、投げごろな河原石が多量に準備されるのが普通であった。しかし住吉城跡には投げごろなこぶし大石は発見されないので大きい疑問であったが、正覚寺南東側平場から1個の頭大石が発見されたことから、その疑問はあきらかになった。〔ハ礫石について参照〕

（二）攻撃正面と向い城

扇山を中心とする尾根の天険をたのんだとしても、この小城は当然包囲攻撃をうけねばならぬものだった。

鎌倉に面する部分は山腹急峻であり、越えることすら困難な天然地形である。されば古道は正覚寺西側から谷をのぼりつめ、扇山支尾根山腹をかりうじて通じていたようである。住吉合戦頃には名越切通が公道として使われていたとはいえ、旧道としての古道は当然鎌倉側正面として攻撃正面になったと考えられる。この古道が光明寺背後で切通となった部分もやがては光明寺付近の急峻山腹を強行突破した軍の攻撃正面にならねばならなかったはずである。

また扇山から南東につづく尾根北東面は光明寺背後尾根を越え、あるいは名越切通を通過して攻め入った北方からの迂回軍または海上から鷺が浦に上陸した攻撃軍によって当然攻撃されねばならぬ正面にあった。

南東尾根の南西面は鷺が浦上陸軍の真正面として当然攻撃正面にならねばならなかったはずである。

包囲戦には向い城の存在を当然考えなければならない。小田原城包囲戦における太閤一夜城の存在はあまりにも有名である。攻撃軍としてはこの場合、光明寺裏山にあたる「うばがやと」北東方尾根（砂山天王山）も、伊勢町背後の伊勢山も、その南にある大崎山も、住吉城と似た高さをもつ丘陵として敵状を監視し、敵軍および味方軍の行動を見下すことのできる丘として、また指揮所の位置として好適であったから当然向い城としての用途にあったと考えなければならない。

伊勢山には天照大神宮とその周辺に平場や切岸の遺構があり、その南東方には伊勢山とよばれる頂が平場となり、周に切岸をもつ楕円状高地とその周囲に「こしまき」とよばれる小字をもつ平場がとりまいており、切岸を伴ったものが残っていた。位置と遺構とからここに有力な向い城の存在が推察される。

天照大神宮南東400mほどに谷をへだてて大崎山があり、住吉城南東面を眼下にみおろす最高地であり、山腹に広い幾段もの平場と切岸を残している。ここは伊勢山よりさらに好適な向い城あつと推察される。

さらに住吉城の北東に谷をへだてた砂山天王山が攻撃指揮に必要な位置と高さをもつものとして

向い城の一つと考えられるが尾根部が広く宅地造成のために削平されたので全く不明になったが、山腹の高所に2段の小平場と切岸の残存が発見されたので、ここにも向い城の存在が推察できる。

向い城は敵状監視および指揮のためばかりでなく、兵員の休養・宿泊の陣所として適当な多くの平場が必要であるばかりでなく、敵の反撃から兵員を守るためにも平場や切岸が必要であった。上記の位置にはそれに必要な構造の残存があるから向い城の遺跡と考えてあやまりあるまい。

(木) 城 の 面 積

戦国時代城郭のもつ総面積と城主の実力とは正比例するといわれている。それは本城面積の比較であることは勿論である。さしも強大を誇った後北條の小田原城もより大なる面積をもつ大坂城を本城とする豊臣秀吉の実力には屈しなければならなかったのである。三浦道寸が最後に籠った新井城も引橋内で西方海中に突出する小網代の半島全域と考える方がむしろ妥当であろう。かなりの面積になるから北條氏に敵対する力は充分あったのであろう。しかし開発が進んだこの地域では城郭遺構と判断されるものは天然地形のほかに多くは不明である。小田原城は現在城郭あととされる小田原城と遺構にとりまかれた小田原市街地を加え、さらに背後につづく丘陵上の城郭遺構を加えるときわめて広い面積になる。早雲当時の小田原城全城の広さを知らないが、それにしても天然地形に加えられた城郭遺構のある全城は三浦氏に比してより広いのではないだろうか。結局数年もちこたえたとはいえ、三浦氏は北條氏に屈したのである。住吉城は旧式の山城をとりたてて新戦闘に適する多くの防禦構築をほどこしたものであるが、それはきわめて小さい出城の一つにすぎなかった。取り囲まれたら長期間もちこたえられるものではなかったのである。

(へ) 礫 石 に つ い て

戦国時代城山には所謂「礫石」とよばれる石合戦用の河原石が各所に残存するのが普通である。津久井城址・玉繩城址・小田原城址・新井城址・小沢城址など何れも多量の河原石が存在した。しかるに住吉城址では過去の調査中全く投げごろの大きさをもつこぶし大河原石を発見しなかった。地山の岩塊を使っただろうとの推測しかできなかった。しかるに今回調査において正覚寺谷の遺構調査中、本堂右(南東)墓地の端にある崖(背後支尾根の先端。内側を垂直に切って境内になっている。)上に平場遺構がみえたので崖高を目測していたら、平場表面から30cmほどの土中に径15～20cmほどの河原石が埋もれているのが知れた。正覚寺谷で最初の合戦があったのだらうと推測しての遺構調査中に合戦になくてならぬ大形河原石の埋没をみたのである。それはおそらく前面海中に残る和賀江島築港遺跡(註5)からもってきた河原石の一つだったと考えた。住吉城にも河原石があったのである。しかも一般城山のものと違う大形のものだった。前面海岸で多量に入手できる大形河原石が住吉城に運びあげられなかった筈がないのである。今までみてきた城跡ではこぶし大の河原石ばかりだったので、住吉城でも同じだと考えたからの不覚であった。激戦の住吉城では山上に運ばれた石の全部が使い尽されたから城中に残っていないと考えなくてはなるまい。しからば投げおとされた石は山裾に発見できるのが普通であるのに、住吉城の場合山裾に散在していな

かった。過去において正覚寺谷および周辺で頭大の河原石が多量に石垣に使われているのをみた。土地の者だけは和賀江島の石を運んで使ってもよいが他所の人が運びだすと祟りがあるとの伝えであるときいていた。それで石垣などに使用のものは築港跡から運ばれたものと思っていたが、古くは谷中の各所に投げおとされたものが散在していたのではないだろうか。正覚寺前海中（埋立以前は10mほどの崖下に直接波がよせていた。）の崖際にはきわめて多くの頭大またはより大きい河原石多量が散在しているのをみている。波で築港跡からうちよせられたものと思っていたが、山上からなげ落されたものだったかもわからない。

その後大形河原石の散在に注意していたら、住吉神社建物周辺の地まわり石にも、境内通路わきにも溝縁にも点々とそれら河原石が使われていること、境内下段平場から旧道に下る路の右側切岸部分の途中にも1個が埋もれていた。特に松井鶴松氏宅わき路傍切岸状部にある櫓の根方には数個の大形河原石が根に巻きこまれた形で埋もれていることが知られた。それらは戦闘中に使われた河原石の残存物と考えられる数例の発見例である。これらの河原石は城跡周辺の山裾各所にも散在したはずである。この土地では硬い河原石はきわめて貴重であるから発見すると自宅に運んで有効に使うのが普通であったときいている。過去に発見された大形河原石は付近農家に運ばれたものと考えてよいのではあるまいか。

9. 総 括

城郭遺跡が保存困難だった理由

戦後文献記録なきことを理由に城郭遺跡であることを否定したことが多かった。そのため多くの城郭遺跡が破壊湮滅した。また、城郭遺跡としてあきらかであり、その価値もあきらかであっても、全城を買収しなければ保存できぬ一般的情勢となったために、広地域にわたる城郭遺跡の多くは調査もされず破壊湮滅した。前者の例としては横須賀市小矢部城址・平作城址・大矢部城址・神金城址。後者としては鎌倉市玉縄城址・杉本城址・三浦市三崎城址・新井城址・横須賀市怒田城址がある。

文献なき郷土の歴史をあきらかにできる最良の資料は各種の遺跡である。学問の進歩により今後更に多くの事実がわかるときまで、遺跡をそのまま保存しておきたくても、それができなかったのである。

城の存在については古今を通じて記されないのが普通であった。文献にないからと否定するが東京湾要塞についてその所在や内容について記したものがあっただろうか。城とは記されぬものであり、記されたのはその城で戦があったということだけなのである。その好例が「関東古戦録」であろう。戦のなかった城については何の記録もないのが普通である。文献がないからとの理由で否定するのは誤りである。

住吉城遺構のまとめ

住吉城の中心は城主の邸館所在地である場所、本丸部分（げんじがやと）であり、内に2か所の井戸が存した。前面は海をひかえた絶壁に臨み、背後と側面の三方を尾根でとりまき、尾根下半を切岸とし、尾根上を削平して戦闘に備え、平場には逆茂木を配すべき狭長な平場を付随した。北西部と南東部尾根には各1個の洞道を作って交通路とした。

邸館所在地前面の守備として、背後尾根に連なる北西および南東に走る全尾根頂を削平し、更にその全山腹部分に幾重にも平場と切岸を構築し、天然の急峻山腹に加えてきわめて厳重な防禦構造があったものであり、城山全体に可能なかぎりの人工を加えたものということができる。かつ近接地海岸に遺存していた鎌倉時代築港跡（和賀江島）から築港基礎に使われた用石中から戦闘に必要な頭大河原石が多量に運ばれていたと考えられるに至った。

住吉城址の価値

住吉城については幸いにも「小田原記」に戦の記録がある。その上古戦場としての住吉城位置がおぼろげながら伝承されていた。その上幸いなことに「故城」をとりたてたという当時の伝承が記されているし、北條早雲対三浦道寸戦の一環中のものであること、概略ながら戦の年代が記されていることなど文献記録があることである。しかも山城としての保存状態がきわめて良好である。部分的に破壊されてはいるが構造を知る上に困るほどの破壊がすくない。

鎌倉の東側に連なる山腹急峻丘陵の先端であり、人馬の通行をはばむ天然地形だったから、古東海道以来困難をして先端から山越をした。源平盛衰記の由比が浜合戦に山越状況を記すのもこの道である。鎌倉後期に対三浦氏（泰村）合戦に備えて北條泰時が名越切通を中心とする大要害を構築したとき、この丘陵は海にのぞむ先端まで尾根外側（返子側）に大切岸が作られた。それが「故城」であった。

北條早雲が一時先端部分を取りたてて城郭としたがいくばくならずして放棄したのを三浦道寸が城郭として再興した。当時の戦法に対し充分防衛できる防禦態勢はこのとき整備された。その充分な防禦態勢として整備された城で戦闘がおこなわれたのが住吉合戦であったが破れた道寸は三崎の新井城に退いたのである。

住吉城は鎌倉後期の戦に備えて造られた後、戦国時代の戦に適応するように充分整備された城である。多くの城郭あとは後世の破壊によってその構造が不明であることが多いのに本遺跡は城郭構造がほとんど破壊されることなく残っていたということは、中世城郭構造研究の上きわめて価値ある存在といわなければならない。

註1 内田武雄氏調一（牛尾安太郎氏談）

大正12年地震前に日本銀行の志村源太郎邸が建ち、このころ正面トンネルができた。大正15年末幣原喜重郎（元首相）邸となり、その後五島慶太郎となり、昭和31年6月秀吉魁^{いさぎ}邸となった。

註2 破壊記録の大部分は内田武雄氏調

註3 内田武雄氏調一（牛尾重郎氏談）

光明寺裏山は昭和15年ころから畑地として開墾され、少しずつ改変されたが昭和22年ころ鎌倉第一中学校敷地として削平されたとき、切通北側部分を崩して切通を埋めた。中学校建設後周辺地に相次いで民家が建つに至った。

註4 逗子市文化財調査報告書第4集（小坪・新宿）昭和48年 逗子市教育委員会

註5 和賀江島は現存する我が国唯一の鎌倉時代築港跡。往阿弥陀仏の発心で材木座海岸に船着の便のために築島されたもの。北條泰時以下幕府要人の助力によって貞永元（1232）年7月15日着工，8月9日竣工。（赤星直忠「和賀江島築港趾」昭和8年 史蹟名勝天然記念物誌 10－3）

付－１ 住吉城址についての諸文献

イ．諸書にあらわれた関係記事

住吉城址と考えられる区域は広範囲にわたり、住吉明神・正覚寺・海前寺・西神明社・小坪寺などによって囲まれる一帯の山、さらに湘南有料道路の飯島トンネル、大正二年に開通した旧小坪トンネルなどのある山までも含めた地域と推察される。山城の姿は、この度の調査によって、激しい破壊の跡をともないながらもかなりはっきりと知ることができた。

住吉古城について書かれた文献を求めて、いろいろさがしてみたが、勉強不足のため思うにまかせず、結局、「逗子市文化財報告書」・「鎌倉市史」・「逗子町誌」などのお世話になって、以下掲載したものを集めることができた。

小田原記に「住吉の古城を取立楯籠る」と見えているし、上杉憲房の京都への書状にも「住吉之古要害取立令蜂起候」とある。永正七年長尾為景が上杉顕定に反旗をひるがえした時に、既に「古要害」と称していることは、住吉の地がこれ以前に要塞として用いられたことを物語っている。

源平盛衰記に治承四年八月小坪合戦の記事がある。この時住吉の地形は三浦方にとって恰好の防禦陣地として使われた可能性は考えられる。しかしこの時は、城郭として用いられたわけではなかった。「古城」とか「古要害」というのには城郭としてはっきりと意識していたことになる。

この度の調査で城址の地形状況が、名越切岸の状況と近似していることが判明した。鎌倉北條氏が三浦氏からの攻撃に備えて築いた名越要塞が、海際の住吉まで延々と続いていたことが考えられないだろうか。若しこの推量が成り立つとすれば、「小田原記」の「住吉の古城」や憲房書状の「住吉の古要害」という呼び方がこの時の要害を指していると納得できるのである。

吾妻鏡 第一

治承四年八月

三浦輩出_レ城来_二于丸子河辺_一。自_二去夜_一相_二一待_二曉天_一。欲_二参向_一之処。合戦已敗北之間。慮外馳帰。於_二其路次由井浦_一。与_二畠山次郎重忠_一。数_レ尅挑戰。多々良三郎重春并郎從石井五郎等殞_レ命。又重忠郎從五十餘。輩梟首之間。重忠退去。義澄以下又帰_二三浦_一。（後略）

源平盛衰記 二十一卷

（前略） 和田の小太郎は本よりつよき魂の男にて、いつの習の閑道ぞ、畠山は平家の方人也、我等は源氏の方人なり、源氏勝給はば、畠山旗を上て参るべし、平家勝給はば、三浦旗を上て参るべ

し、爰を問はずば後に笑はれん事は疑ひなし、人は浪打際をも打給へ、義盛は名乗て通らん、同心し給へ佐原殿とて、鎧の表帯しづしづと結かため、甲の緒をしめ弓取直して、鐙に幕附けさせて、大音あげて、是は畠山の先陣歟、^{かべう}角云は三浦党に和田小太郎義盛と云者也、石橋の軍に、佐殿の御方へ参りつるが、軍既に散じぬと聞けば、酒匂宿より帰^り也、平家の方入して留めんと思はば留めよと、高く呼つてぞ打過る。敵追ひ来らば返合て戦はん、さらずば三浦へ通らんとて、馬を早めて行く程に、八松が原、稲村崎、腰越が浦、由井の浜をも打過て、小坪坂を上らんとぞしたりける。斯る処に畠山は本田、半沢に云けるは、三浦の輩にさせる意趣なし、去共加様に詞を懸らるる上に、父の庄司伯父の別当平家に奉公して在京なり、矢一射ずば平家の聞れも恐あり、和田が言葉も咎めたし、打立者共と下知しければ、成清は仰の旨透間なし、急げ殿原とて、五百餘騎、物の具かため馬にのり、打てや早めとて追ければ、同じく小坪の坂口にて追附たり。(中略)三浦三百餘騎、畠山に懸られて、小坪の峠^{ひか}に打上り、轡を並べて磐へたり。小太郎伯父の別当に云ひけるは、そこには東地に懸りて、あぶずりに垣楯かきて待給へ、かしこは究竟の小城なり、敵左右なく寄がたし、義盛は平^{たいら}に下りて戦はんに、敵よわらず両方より差はさみ中に取籠めて、畠山をうたんにいと安し、(中略)畠山次郎は五百餘騎にて、由井浜 稲瀬河の耳に陣を取て、赤旗天に耀けり。和田小太郎は、白旗さゝせて二百餘騎、小坪の峠より打下り、進め者共とて渚へ向いて歩ませ出づ。(後略)

北 条 五 代 記 卷之三

- 一 永正九年壬申八月十三日相州岡崎の城にみうらの介道寸居城を北條早雲せめ落す道寸ハ同すみよしの城に移る事
- 二 永正年中三浦介道寸と北條早雲かまくらにをいて合戦す道寸討まけ敗北し三浦新井の城に引こもる事

北 条 五 代 記 卷之九

三浦介道寸父子滅亡の事

聞しハ昔相州の住人三浦介受領陸奥守従四位下平義同法名道寸と号す子息荒次郎弾正少弼義意と云て父子名をえたる侍あり是ハ大介義明の後胤なり平治の合戦にをいて三浦荒次郎義澄ハ源氏にくははり軍せし事古記に見えたり然に伊豆の国に伊勢新九郎平氏茂と云武士あり後ハ入道し北條早雲と号す此早雲相模小田原の城を明応の比ほひのつとり上杉朝良居城同国大庭の城をも責おとす永正元年九月早雲と官領上杉顕定と大合戦あり三浦介道寸ハさかみ岡崎の城に有て早雲とたゝかひしが叶はすして同九年八月十三日城を開退し同きすみよしの城にうつり年久しく論敵たりしか鎌倉合戦に道寸討負敗北すされとも秋屋の大くつれにてさゝへたり此道ハ高山くつれて海に入片岸に道有て一騎うちなれハ幾万騎むかふといへ共叶ひかたし然共早雲大軍にて小坪秋屋長坂黒石(註一黒石は林村にあり)佐原山を打越みたれハ道寸かなはす父子一所に雑兵二千ほとにて三浦新井の城にたて籠る。

小田原記（北条記）二

可諄討死の事

斯る処に、上杉の家老長尾六郎為景、起逆心越後の守護上杉民部大輔房能を。越後の雨溝と云処にて討殺し。越州を乗取しかば、管領顕定入道当屋形憲房を相伴ひ、上州より打立越州へ押寄、永正六年七月廿八日長尾六郎を責給へは、為景軍に打負て、越中国西浜へ落行ける。可諄憲房戦に討勝猶國中并近辺の下知して在国したりしに、明る永正七年六月十二日越後の一揆とも高梨摂津守を大将として為景にかたらはれて悉く蜂起しければ、憲房椎屋と云所へ押寄責給ひけるか、忽に討負て、憲房妻有の床に引籠り、猶軍勢を催し、上州の勢を待て、彼を退治有へしと宣ふ処に、長尾高梨勝はこりたる威勢、なじかは少もためらふへき。則打立押寄ければ同六月廿日顕定入道長森原へ出合散々に戦、長尾六郎を追立てける処に、高梨摂津守馳来て、顕定を討取申ける。此人は上杉家中興の管領にて、十四歳にて上州に來り、久しく武將と被仰、今年五十七歳と聞へし。法名は可諄大居士とそ申しける。闇々と高梨に討れ給故に長尾勢雲霞のごとく集りしかば、憲房越後の在国不叶して上州へ帰り、白井城に籠りける。此折節、上杉の長臣無二の忠功を成ける長尾左衛門景春入道伊玄、逆心を起、同名六郎と一味して既に打立ければ、近親の我子上戸駿河守、太田備中守種々諫めけるは、昔より普代の主に向て弓を導入、一人として運を不持必滅ふといへり。然らば今度の謀叛必味方の負成へし。思留り給へかしと云けれ共、伊玄入道不用して、軍兵を相催し、沼田の庄へ陣を張、又小田原の城は、伊勢新九郎早雲も彼六郎と一味して已に相州住吉の城を取立出張す。此時上杉治部大輔入道建芳の被官上田蔵入入道、彼早雲か下知に随ひ武州神奈川へ出張して権現山を城に構へたり。近年の乱逆に国衰へ、諸候力を屈しかば四夷弊に乗して起る事、蜂のごとし。就中伊玄入道は当家の重臣一門の耳目成しかば、不義の六郎と与しけるこそ浅猿けれ。憲房の周章、唯熱湯にて手を濯がごとし。

権現山合戦之事

去程に、上田蔵入入道武州神奈川へ打て出、熊野権現山を城郭に取立、小田原の宗瑞と引合謀叛の色を立にけり。早雲小田原には子息新九郎を留め、吾身は松田大道寺以下の軍勢を引率し、高麗寺山并住吉の古城を取立楯籠る。（中略）

然共後陣の軍兵重て押寄、十一日より廿日迄昼夜共に被責て、其上出城の本覚寺山を取れければ、不叶や思けん。城に火を懸同廿日夜中に、上田を始め行方不知落行ければ皆悉敗北す。則憲房使者を以て京都へ訴申、六郎を可討由さゝへ申、其状云。

（前略）伊勢新九郎入道宗瑞、長尾六郎与相談、相州へ令出張高麗寺並住吉之古要害取立令蜂記候。

然間建芳被官上田蔵入入道令与力宗瑞神奈河権現山を取、地利致兼候間、建芳自身向彼地罷在候。

（下略）

義同討死之事

相州星崎の城主三浦介義同、後には陸奥守入道道寸と云。文武二道の良將也。其子荒次郎義意を三浦新井城に籠め、吾身は相州岡崎に居住して、管預の命に随ひ、相尋中都を知行して、威勢近辺に無雙也。此岡崎の城と申は、昔頼朝の御時、三浦大介義明の弟岡崎患四郎義実が住し城とそ聞し。

三浦一門数年住し所に、要害嚴重支度せり。子息荒次郎義同を、上総守護真里谷三河守が婿にして、隣交の盟厚して弥光彩生門、相州は不及申、武州の兵も多来て相隨ふ。小田原の早雲如何にもして三浦を責落し、相州平均に治はやと思はれければ、永正九年八月十三日、伊豆相模の勢を催し岡崎へ押寄たり。三浦介佐保田豊後守以下切て出合戦す。敵味方の関大山も崩て海に入、坤軸も折て沈むかと覚る計の有様也。三鱗の旗と中白の旗入交り、十文字に割て透り、巴の字に追廻し、東西南北に馳違て戦しか。運や尽けん。さしも大剛の三浦介、散々に打破られ、一二の木戸も被責破、詰の城に籠りけり。心は飽まで進めとも、家の子郎等走寄、一先落ちて重ねて兵を催し此鬱念を可遂とて、城の搦手より落て、同国の住吉の城に落行ける。又住吉をも被落て、三浦の城へ落行、度々人衆を集め合戦に及しかとも、一陣破ぬれば残党不全、終に打勝事なく、口惜や思けん。遙に有て鎌倉へ出陣しけるを、早雲聞も入れず押寄て責給へば、散々に懸負、三浦へ引返す。小田原勢、追懸々々責ければ、三浦陸奥守父子新井の城に楯籠る、早雲三浦に押寄、向ひ城を取て、三年まで食責に攻給ふ。(後略)

武家事紀 三十四 上杉憲房書状案写 <神奈川県史 資料編3>

(為景) (政盛) (永正七年六月) (上杉顕定)
(前略)然処長尾六郎・高梨根津守競来候間、同廿日逐一戦、可諄討死、不及申次第候、椎屋一戦
(越後国) (乗カ) (上野国)
之後者、妻有之庄=某立馬候、國中如此之上者、力不及、関東江入馬白井=候ニ、長尾左衛門入
(景春) (心カ) (上野国) (上野国)
道伊玄起逆意、彼同名六郎致一味、沼田之庄内エ打入、号相俣地=令張陣候間、今ニ有此方=取向候、
(足利政氏) (長氏)
古河様無御餘儀、建芳モ無等関候間、別條之子細無之候、伊勢新九郎入道宗瑞長尾六郎ト相談、相
州江令出張、(餘綾郡) (三浦郡) 高麗寺并住吉之古要害取立、令蜂起候、(後略)

鎌倉九代後記

永正九年八月十三日、三浦道寸か居す相州岡崎城へ、北條早雲押しよせ、急に是を攻む、三浦が郎等佐保田豊後守以下防戦すといへども叶はず、道寸搦手より遁出、同国住吉城に入る。彼城も遂に早雲がために退去し、其後三浦の新井城に居す。

鎌倉日記

道寸城 三浦道寸義同が古城、光明寺の南隣の山なり。永正の比にや、北条早雲と戦ひて三浦新井へ引籠り、三年ありて終に討死す。北条五代記に詳なり。別紙に図あり。小壺村の内にも古城山あり、図に見えたり。此所より飯島などを望みて、由比浜を帰る。

新編鎌倉志

三浦道寸城跡

(ママ)

正覚寺の西南の山あり、切抜の洞二十余間ありて、寺へ抜通なり。前に道あり。此を三浦道寸が城の跡と言ふ。

〔鎌倉九代記〕〔北条五代記〕等に、三浦陸奥守義同入道道寸、永正九年八月に、北条新九郎長

氏に、相州住吉城をも攻落さるゝとあるは此処なり。里人、光明寺の南方の山を道寸が城跡なりと指し示す。則此処へ相續て同所也。俗にくらがりやぐらと云ふ。総じて鎌倉の俚語に、巖窟^{いわや}をやぐらと云なり。

鎌倉攬勝考

三浦陸奥守義同入道道寸城跡

小坪正覚寺の東南住吉^(ママ)の社あるゆへ、住吉の城とも唱へし由。城山は、光明寺の山より地つゞけり。此所を三浦道寸が城跡といふ。住吉の社地より山中を切抜たる洞口を、大手口なりといふ。入口の洞穴を、例の土人が方言に、くらがりやぐらと称す。平坦の地四ヶ所有。亭宅を構へしは、〔北条五代記〕に、永正六年、上杉治部少輔建芳が被官、上田蔵入入道、北条早雲が下知に従ひ、武州神奈川へ出張し、熊野権現山に城を構へ、謀叛の色を立けるゆへ、早雲、小田原に新九郎氏綱を留置て、松田・大道寺以下の軍勢を率い、高麗寺山並住吉の城を取立てるとあるは、此地の事なり。扱早雲は、住吉の城より神奈川へ押寄せ戦せし由。其後此所に三浦道寸を置いて守らせけるが、是も又敵の色をなしけるゆへ、同十三年七月、早雲が為此城攻落され、道寸父子討る。此入道が太刀並系図文書等、今円覚寺中寿徳庵に蔵す、其由来は知れず。城山の図爰に出す。扱此地は三浦郡なれども、鎌倉に接附しけるゆへ茲に出せり。

新編相模国風土記稿 百八 村里部 三浦郡 卷之二

小坪村、坂三 一は村北にあり、名越坂或は名越切通と云ふ、鎌倉郡大町村名越町に達す、故に此名なり、登二町 一は広尾坂村の中程にあり 登六町、一は飯島にあり、小坂にて切通なり、〔元禄国図〕に住吉切通と載する是なり、永正九年三浦介義同北条早雲の為に敗走し、三浦へ退去の時、此切通にて支へ合戦せしとの伝あり、尚下の城跡の条に併せ見るべし、此餘山間に孔道四あり、是土民捷徑の為に穿つ所なり、高七、八尺長七、八間より十五間に至る。土俗通谷倉と呼ぶ。

住吉古城蹟、正覚寺院内住吉明神の社地是れなり、背は山に抱り前は海に臨み、要害の山城なり、造築の始詳ならず、永正七年長尾六郎為景、蜂起の時北條新九郎入道早雲假に当所の古城を取立て楯籠る。

上杉憲房上乘院に呈する書曰、伊勢新九郎入道宗瑞長尾六郎と相談相州へ令出張高麗寺並住吉之古要害取立令蜂起候。

〔小田原記曰〕上杉の家老長尾六郎為景逆心を起し、永正七年六月顕定を討取申しける、小田原の城主伊勢新九郎早雲も彼六郎と一味して己に相州住吉の城を取立出張す、去程に上田蔵入入道武州神奈川へ打つて出、熊野権現山を城郭に取立小田原の宗瑞と引合謀叛の色を立にけり、早雲小田原には子息新九郎をとどめ吾身は松田大道寺以下の軍勢を引率し高麗寺並住吉の故城を取立て籠る

されど早雲も須臾にして当城をすてしかば後三浦介義同が抱城となりしにや、同九年には義岡崎

正覚寺境内図



図（付）－１ 正覚寺境内図（新編相模国風土記稿より）

の居城を北条早雲に攻落され姑く当城に通しが又此城をも没落して三浦城に奔りし事〔小田原記〕に見ゆ。

三浦介義同永正九年八月十三日小田原早雲に岡崎城を攻落され、搦手より落て住吉の城に落行ける其後亦住吉をも落されて三浦の城へ落行。

其後廃城となりし年代詳ならず。

按ずるに北条氏当国併呑の後廃却せしにや小田原分国より以来当城の事諸記録に見えず。

別に「正覚寺境内図」あり。（図（付）－１）

三浦古尋録

正覚寺ノ上ノ山ヲ住吉ノ城跡ト云此城ハ三浦道寸ノ居城ニシテ永正九年八月十五日北条新九郎入道早雲ノ為ニ落城

（中略）

掘抜ノ穴東ノ方ハ表門北ノ方ハ裏門住吉城雙方掘抜也裏門ヲ出レハ姥ヶ谷小坪ノ後也

三浦郡誌

住吉城趾、小坪の西北部字飯島に在り、山を背にし海を前にし要害の山城なり、築造の初詳ならず、北条早雲武相経略の初、永正七年六月長尾為景、上杉顕定を討ちしに早雲為景に通じて此城を守る、

後三浦道寸の支城となり、永正九年八月早雲、道寸を岡崎城に攻め、道寸退きて此に陣し、更に新井城に籠る、後久しく廃墟となる、現在其の地に住吉神社あり。

寛政九年七月「正覚寺過去帳」 逗子市文化財調査報告書による

中興御開山本山十八世真蓮社快誉上人天文十年三月十四日起立、初号悟真寺後号正覚寺、然兩上杉之折小田原城主氏重、責三浦道寸依去破却悟真寺於此所構出張離防戦、終打負、荒次郎住吉城於自害、故歴代祖不知、寺宝記録等忘失、

吉田東伍 大日本地名辞書（坂東）

住吉谷、小坪の西北、飯島光明寺の南東とす。○新記云、正覚寺は住吉谷にあり、悟真院と号す、浄土宗、高僧伝曰「相州光明寺開山、釈良忠、字然阿、仁治元年、屈相之鎌倉、住住吉谷悟真寺、勸唱念仏、平経時、於佐介谷建蓮華寺、延為開山祖、後革寺額、以光明寺」中世戦争に逢て廃寺となり、後天文十年、光明寺十八世、真蓮社快誉再興す、住吉明神社は正覚寺後山上に在り、（康安二年文書に、小坪住吉神田一段并に畑一枚と見ゆ）飯島の鎮守なり、上杉憲房上乗院に呈する書曰「伊勢新九郎入道宗瑞、長尾六郎と相談、相州へ令出張、高麗寺 住吉之古要害取立、令峰起候」、小田原記曰「上杉の家老長尾六郎為景、逆心を起し、永正七年六月、顕定を討取申しける。小田原の城主伊勢新九郎早雲も、彼六郎と一味して、已に相州住吉の城を取立出張す」云々。○永正九年、三浦道寸入道攻めて住吉城を取りしが、又早雲の奪回する所と為る、城址今も弁識すべし。補「住吉山」○旧蹟地志、住吉山は住吉神社あり、往昔は浄土宗の寺もありけりと、永正七年北条早雲此に要害を起したり、三浦義同之を取り、九年の戦には之に立こもれり。

ロ. 文献について

『吾妻鏡』

鎌倉時代の史書。幕府の事跡を変体漢文で日記体に述べている。源頼政の挙兵（1180）から前將軍宗尊親王の帰京に至る87年間の記録。編集は鎌倉幕府。

『源平盛衰記』

鎌倉中期、末期の成立とされているが、建長二年という説もある。『平家物語』の異本ともいわれている。

『小田原記』

文禄二年（1593）九月に小田原で旧臣と思われる25歳の者が書いたと『国書解題』の中の写本九巻本の奥書に述べられているが、小田原北条滅亡直後に遺臣の誰かによって書かれたものと思われる。

『北条五代記』

三浦浄心（1565～1644）の『慶長見聞集』の中から後人が小田原の後北条氏に関する部分を抄録したものといわれている。

『鎌倉九代後記』

著者も年代も不明であるが、書名が浅井了意（1640～1709）の『北条九代記』と『鎌倉九代記』というのに対して名づけられたといわれることは、その年代についての参考になる。

『鎌倉日記』

水戸光圀が延宝二年（1674）鎌倉の史蹟を巡覧して、史料を採った旅の日記で、家臣吉弘元常らが筆を執っている。

『新編鎌倉志』

延宝年中（1673～1680），徳川光圀が其の臣河井恒久・松村清之・力石忠一等に命じて纂録させたものである。

『鎌倉攬勝考』

文政十二年（1829）武州八王子の人植田孟縉により編纂された。

『新編相模国風土記稿』

『新編武蔵国風土記稿』に続いて、江戸幕府の昌平黌地理局（林述斎＜1768～1841＞総裁）が編纂した地誌。天保元年（1830）に着手し同十二年（1841）に脱稿している。

『三浦古尋録』

西浦賀の加藤山寿によって文化九年（1812）に著わされた地誌である。

『三浦郡誌』

大正七年（1918）三浦郡教育会によって編纂された地誌である。

付-2 住吉城址における葬送遺構

イ. はじめに

住吉城址は、扇山を主峯として北は小坪峠路に、南は小坪部落に達する丘陵一帯が城郭とされている。その中には葬送関係の遺構も数多く見られる。葬送遺構は、城郭遺構と直接的な関係はないが、この遺構の存在によって、城郭そのものが中世には確実に存在したことを物語っている。以下それらを説明し、論考を加えたいと思う。

それらは、まず中世供養塔の散在地（五輪塔、宝篋印塔等）と、中世墳墓堂である「やぐら」とに大別できる。付け足りではあるが、古墳時代の横穴も城址内に存在するのであわせて説明することにする。

ロ. 供養塔散布地

(A) 小坪寺周辺

小坪西町の東側隅にある小坪寺は、城郭構造の南側に位置し、墓地は3ヶ所に分散している。便宜上、下から第1墓地、第2墓地、第3墓地とする。第1墓地から第3墓地まで共に室町期の五輪塔、宝篋印塔断石が散在している。

小坪寺の東下側にある稲荷社にも五輪塔、宝篋印塔断石が散在している。

(B) 神明社周辺

小坪の集落のほぼ中央に位置している神明社に登る石段途中に五輪塔、宝篋印塔断石が散在している。また神明社の西側に隣接している稲荷にも五輪塔断石が散在している。

(C) 海前寺周辺

小坪西町の西側にある海前寺は、下から第1墓地、第2墓地、第3墓地と便宜上分ける。第1墓地には宝篋印塔断石が、第3墓地入口付近には五輪塔、宝篋印塔断石が散在している。第2墓地に供養塔が散在していないのは、この墓地が新しい時代に造られたことを物語るので、現に、現代の墓石のみが並んでいる。

(D) 町田敬二氏宅

小坪5丁目-13の町田敬二氏宅の庭に、五輪塔断石が庭石として使用されている。この他に、付近の家々の庭には、数個単位の五輪塔などの供養塔断石が散在している。

(E) 正覚寺内供養塔群

正覚寺の階段を登った入口左側に供養塔類（鎌倉後半期～室町期）が多数置かれている。

これらの供養塔は、松井久雄氏のところにある2穴のやぐらや、境内にあるやぐらから出土したものを、一括にしたものであるという。(註1)

(F) 光明寺境内供養塔群

光明寺境内には、鎌倉後半期～室町期にかけての供養塔群がある。これらは、鎌倉市立第一中学校を造成する際に、光明寺背後の山腹からでたものという。又、光明寺境内、本堂の右手に地藏座像、板碑、安山岩製燈籠の基台と蓮座がある。この地藏は、鎌倉末期のもので(像背面右下に正中二年乙丑の銘がある)、もとは光明寺背後の山腹窟中にあったものだが、第一中学校造成時に現在の場所に移したものである。(註2)

(G) 内藤家墓地上平場

光明寺にある内藤家墓地上の平場には、五輪塔、宝篋印塔の断石が数多く散在している。

(H) 牛尾東作家墓地

住吉城址の北はずれに位置する所に牛尾東作家の墓地がある。その中に五輪塔断石が数個見られる。

供養塔散在地は城郭内に8ヶ所をかぞえる。

供養塔は、機会あるごとに移動されることが多く、建造当初の場所にあることは少ないが、8ヶ所の散在地にある供養塔は、みな付近の山腹や、やぐらなどから出土したものであることは間違いないだろう。よって、これらは、この周辺に葬地があったことを物語るものである。

ハ. やぐらの分布

(1) 海前寺やぐら群

海前寺の背後の山腹に、3穴のやぐらがある。そのうち北側にある1穴は、首塚と呼ばれ(註3)、横穴の転用と思われ、赤星直忠氏の編年による奥壁がドーム型を呈している。(註4)

海前寺に入る入口部分に1穴開口していたやぐらは、現在道幅を広げる工事の為に埋没してしまった。かなり大型のやぐらと聞いている。

(2) げんじヶ谷やぐら群

小字げんじヶ谷の北側に開口する2穴からなっている。現在2穴共倉庫として使用されており、内部の詳細は不明であるが、秀吉邸を管理している牛尾安太郎氏の話によれば、以前から開口していた穴を利用して改造したものであるということで、やぐらと考えて間違いなからう。

(3) 正覚寺やぐら群

3穴のやぐらから成っている。1穴は、正覚寺入口にある駐車場の裏に、もう1穴は、本堂の裏にあり、これは新編相模国風土記稿によれば、正覚寺に伝わることとして、鎌倉時代の高僧然阿がこもった窟といわれていた。(註5)現在物置として二次使用されている。もう1穴は墓地の中程にある。現在は、歴代住職の無縫塔が納められている。3穴とも比較的大型のやぐらで、鎌倉期の形態を示している。

このやぐらから出土した供養塔類は、先に記した正覚寺境内入口付近に集められている。

(4) 住吉神社下やぐら

住吉神社の階段下、秀吉邸内に向うトンネルとは相対する場所に1穴開口している。

(5) 松井定吉氏墓やぐら

小坪5丁目-13、松井定吉氏墓に1穴のやぐらがある。内部は半分以上埋没していたが、左壁に竈があり、内部に五輪塔の空風輪が転っていた。

(6) 松井久雄氏墓やぐら群

小坪5丁目-12、松井久雄氏の裏庭に、2穴のやぐらから成る。

現在、物置きとして使用されているが、風化が著しく細部は不明である。向って左側のやぐらは、戦争中防空壕として使用していたらしく、左奥に掘った部分がある。(註6)

(7) 日本光学テント村内やぐら群

日本光学テント村には9穴のやぐらが存在する。これは3ヶ所に分布しているので、入口部分にあたる3穴を1グループ、その上段にあたる2穴を2グループ、更に最奥部にあたる4穴を3グループと便宜上する。

1グループ

日本光学テント村の入口すぐ右手に3穴から成っている。共に小型で、入口部分に羨道をもたない室町期のものである。

2グループ

1グループより一段上の場所に当たり、現在トイレの裏手に位置する2穴から成っている。

トイレの裏にあるやぐらは、現在1/3程埋まっているが、内部には五輪塔が多数詰っている。五輪塔は、鎌倉期(後半)の特徴を有する。

トイレ右手にあるやぐらは、ほとんど旧状を見ない程崩されているが、五輪塔断石が残存している。

3グループ

日本光学テント村の最奥部に位置する4穴のやぐらから成っている。4穴ともほぼ同じレベルで並んでいるが、向って左側にあるやぐらは、前面部分が崩れ、現地表面より約1mのところ河原石が人為的に並べられ、中に火葬骨を伴っている。さらに、その上には五輪塔の地輪がのっている。

3グループから更に4m程上った山腹に1穴あいているが、その形態からみて横穴であろう。

(赤星氏のいうところの、断面アーチ型、奥壁ドーム型を呈している。)(註7)

日本光学テント村にあるやぐらは、最奥部から徐々に時代が新しくなっていると考えられるが、この場所は、継続して葬地として営まれたものといえよう。(註8)

(8) 光明寺内藤家墓地上やぐら群

光明寺の内藤家墓地上に、6穴のやぐらから成っている。現在防護のためにつくられた金網に隠れている1穴と、その南側10m程離れたところにある4穴、更にその南側に1穴ある。

この周辺において、鎌倉市立第一中学校を設立する際に多くの五輪塔が出土しているので、やぐらは、本来もっと多数存在していたものと思われる。

(9) 飯島やぐら群

小坪から材木座にぬける海岸路に、9穴から成っている。奥壁に複室のあるものなど、かなり大型のやぐらである。この中の1穴から、懸仏、古鏡、夜光貝、鉄製品、かわらけ皿、木炭片、火葬骨入常滑壺などが出土している。古鏡は12枚をかぞえ、鎌倉周辺で多数出土の唯一の例である。(註9)現在は8穴が痕跡を残している。

(10) ぼんばたけ西谷横穴

現在の秀吉邸の門を入ってすぐの西側小谷内で、谷の中腹に1穴存在する。南向きに開口し、入口部は、切りとられている。羨道のくびれがあったかどうかは不明である。平面はハゴイタ状を呈する。断面アーチ型のもので、赤星直忠氏の編年(註10)によれば、もっとも新しい形式を示すものである。なお内部奥壁に造りつけの棺座がある。付近には、なお幾つかの横穴の存在が考えられる。

城郭内のやぐらは9ヶ所をかぞえる。やぐらは、中世(鎌倉後半期～室町中期)において、武蔵南部から相模国に多く分布する墳墓穴である。

やぐらや中世供養塔が存在することによって、鎌倉期において、城郭の一部が葬送の地となっていたことが判る。

二. ま と め

以上が住吉城址内及びその周辺にある遺物散布地ならびにやぐら所在の概略である。中世墳墓穴であるやぐらの存在から考えて、やぐら造成時において、平場はすでに存在したか、又その当時造られたものであることは間違いあるまい。

やぐらは、山腹に穴をあけてつくられた中世墳墓の一様式で、鎌倉及びその周辺に群集する地域色の濃い墳墓様式である。鎌倉を離れると、その数は急激に減少する。やぐらの諸々の問題に関しては、赤星直忠氏や大三輪龍彦氏の論考が多くある。(註11)

葬制については、問題点が多くあげられるが、本報告書は、葬制の報告書でなく城郭遺構の報告書であるから、いくつかの問題点を提起しておくにとどめる。

第1点として、山腹に穴をあけて造られたやぐらに、なぜ埋葬されるようになったのか。それは、仁治三年(1242)正月十五日の禁令「府中墓所事、右、一切不可有、若有違乱所者、且改葬之由被仰圭、且可被召其屋地矣」が大きなきっかけとなったと思われる。従来は平安期からの流れをくむ墳墓堂を、市中に造っていたと考えられるが、日常生活面がさほど広くなく、人口が増大してくると、このような墳墓堂などの平地墓地が市中に造られると、生活の維持が困難になるために、前記の禁令がだされたと考える。事実、これ以後の時代に、周辺の山陵(七切通、天台山、鷲峰山一帯など)にかけて、やぐらが多く造られた。

それと関連して、大三輪氏はその論文の中で、やぐらを伴う寺院址の中で、律宗系寺院のしめる割合の多いことから、石造建造物の製作技術をもっていた律宗系の集団が、それに大きく関与していると述べているが、大三輪氏はやぐらの時代的流れは、問題にしていない。よって、赤星直忠氏のやぐらの編年（註12）を改めて検討したうえで、その数量は大きな変化をきたすものと思われる。

さらに、名越周辺のやぐらについては、おおよそ120～130穴の存在が確認されているが（註13）、鎌倉市外ということか？ 大三輪氏は、その論考の中で（註14）除いているが、これを加えるとその割合は大きく変化をきたす。それは、名越周辺寺院のほとんどが日蓮宗系の寺院であり、名越やぐら群の中心部であるまんだら堂やぐら群に残された五輪塔には、題目の刻まれたものも見かける。よって、この周辺のやぐら群は、大三輪氏の弁を借りれば日蓮宗系の人々に関係のあるやぐら群であることは明白である。

第2点としてやぐらの形態があげられる。やぐらの形態は、墳墓堂と同じ性格をもつものであると仮定するならば、赤星直忠氏の横穴編年論と同じような考え方が成立する。そうした時に、家型を呈するやぐらが、初期の段階につくられ、徐々に変化をきたし、終末期の室町期にいたっては、単なる箱型の埋葬穴へと退化してしまう。これが普通考えられる論理であるが、鎌倉市内に存在するいくつかの家型やぐらは、事実上、正規の調査がなされておらず、今後の課題として提起しておく。（註15）

第3点としてやぐら内に存在する供養塔の問題がある。

やぐらやその付近に散在している五輪塔、宝篋印塔等は、埋葬された者への供養の塔婆である。やぐらの壁面に、仏像や供養塔類が彫刻されているものもあるが、これもやはり同じ意味をもつものと考えるが、これらの供養塔類の中で、無縫塔だけは私が調査した限りにおいてみることはなかった。鎌倉時代において、無縫塔は主として禅宗僧侶の供養塔であることから、僧侶はやぐら埋葬以外の方法がとられていたと考えられる。（註16）

以上、思いつくままに問題点を提起したが、この他にも多くの問題が、中世の葬制の中に残されている。先にも記したように、ここにこれらの詳細を述べることは本筋ではないため、次の機会にゆずるものとする。

ともあれ、この住吉城址付近に存在するやぐら群は、鎌倉後期～室町初期にかけてのものであり、その存在する前面に広がる平場は、当時のものであることが実証でき、又、この城が、古城を戦国期初期に再利用していることを、確実に立証するものである。その意味で、中世墳墓の重要性とは別に、これら葬送遺構や遺物は住吉城そのものを考える上でも好資料といえよう。

註 1. 赤星直忠「正覚寺境内の塔」『逗子市文化財調査報告書第4集』 逗子市教育委員会 1973.3

註 2. 赤星直忠「鎌倉の石造建造物」『鎌倉市史考古編』 吉川弘文館 1967.10

- 註 3. 付近住人の話による。
- 註 4. 赤星直忠「やぐら ― 鎌倉における中世墳墓の様式」『鎌倉市史考古編』 吉川弘文館 1967.10
- 註 5. 『新編相模国風土記稿』 図(付) - 1 を参照
- 註 6. 赤星直忠氏は、『逗子市文化財調査報告書第4集』で、「正覚寺裏やぐら」として紹介しているが、「正覚寺やぐら群」とまぎらわしいので、今回は、「松井久雄氏裏やぐら群」とした。
- 註 7. 赤星直忠「横穴の編年について」『鎌倉市史考古編』 吉川弘文館 1967.10
- 註 8. 赤星直忠氏は、『逗子市文化財調査報告書第4集』で、「住吉やぐら群」として紹介しているが、ここでは、「日本光学テント村やぐら群」として紹介した。
- 註 9. 赤星直忠「飯島の出土品について」『鎌倉』第4巻第2号
「第58回鎌倉史蹟めぐり記録」『鎌倉』第4巻第4号
- 註 10. 註7に同じ。
- 註 11. 赤星直忠「鎌倉・室町時代墳墓の様式としてのやぐら」『歴史公論』4巻7号 1935
赤星直忠『鎌倉市史考古編』 吉川弘文館 1967.10
赤星直忠「石造建造物と矢倉」『日本の考古学Ⅶ』 1969
赤星直忠「やぐらの発生」『新版仏教考古学講座』6 雄山閣 1973
大三輪龍彦「鎌倉地方のやぐら発生に関する諸問題」『物質文化』第11号 1970
大三輪龍彦『鎌倉のやぐら』 かまくら春秋社 1971.4
- 註 12. 註4と同じ
- 註 13. 赤星直忠「まんだらどうやぐら群」『逗子市文化財調査報告書第4集』 逗子市教育委員会 1973.3
- 註 14. 大三輪龍彦「鎌倉地方やぐら発生に関する諸問題」『物質文化』第11号 1970
- 註 15. 家型のやぐらは、鎌倉市内で数ヶ所見られる。その中で、鎌倉期において倉庫であったと伝えられるところもある。しかし十二所にある家型やぐらは、やぐら内部やその周辺に、供養塔断石が残存しているので、墳墓窟と考えて間違いあるまい。
- 註 16. 円覚寺、建長寺の開山の無縫塔は平地にあり、無縫塔下に蔵骨器が埋葬してある。

あ　と　が　き

本城址の調査・測量ならびに報告書作成には、下記の人々と機関の協力および援助によってなされた共同作業の成果であることを明記しておく。

現地調査・測量については地主・その他、地元の方々に、多くの迷惑をかけ、また多くの協力をいただき、お詫びするとともに感謝いたします。とくに秀吉弘章氏・秀吉慶子氏・日本地所株式会社・松井久雄氏・牛尾安太郎氏・常盤 清氏には、色々と便宜をはかっていたいただいた。

また、測量技術については、宇内建設ＫＫおよびＫＫ辰巳測量設計事務所に多く指導していただいた。紙上をもって御礼申し上げます。

本報告書の本文原稿は、『住吉城址』の２を山田享史が、その他のすべて（１，３～９）を赤星直忠がそれぞれ執筆した。（付）－１『住吉城址についての諸文献』イ・ロを内田武雄が、（付）－２『住吉城址における葬送遺構』イ～ニを海原泰江がそれぞれ執筆した。

写真図版の１は逗子市教育委員会から、５は君島安正氏からそれぞれ提供されたものである。その他のものについては、もっぱら赤星直忠・築地文博、塚田明治が、撮影したものである。

挿図については、塚田明治が作図し、総括的な編集をもおこなった。

末筆ではあるが、文化庁記念物課・神奈川県教育庁文化財保護課の方々の理解と協力を深く感謝するものであり、御礼申し上げます。

調 査 参 加 者（順不同）

調査団 赤星直忠，宇内城一，塚田明治，軽部一，海原泰江，築地文博，杉山俊一

一 般 飯田博和，鈴木克幸，小林幹雄，穂積保秀，西山健司，斎藤良紀

大学生 岡田義春，長谷川正教，鍋島毅志，小倉 真，東海林碧

神奈川県教育庁，小川裕久

逗子市教育委員会，教育長 小林正三，教育次長 鈴木貞男，社会教育課長 堀内智也，職員 島森重政，窪田 浩，内田武雄，服部二郎，小沢 充，梶谷忠志，小野寺幸光，鳥越由紀夫，山田享史

